

長迫遺跡C地点

2015年

日田市教育委員会



長迫遺跡C地点全景（南から）

序 文

大分県日田市は、市街地に広がる小さな盆地を中心として、それを取り囲む山林が市域の82.9%を占める山間都市です。この地形的特性を生かした林業は「日田杉」というブランドを確立し、近代以降の日田の経済を支えてまいりました。本書は、この林業振興を目的として造成されたウッドコンビナート（日田高度木材加工団地）へのアクセス道路として計画された市道田島有田線改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

今回報告いたします本地点は、平成10年に発掘調査によって、本遺跡がそれまでの調査で明らかとなっていた古墳時代から古代を中心とした大規模な集落であることを追認することができました。調査後、十数年が経ちますが、その間、本遺跡がある求来里川流域では、数多くの遺跡が発掘調査が実施され、旧石器時代から近世にいたる様々な遺構や遺物が発見されてました。本遺跡も求来里川流域に展開する数多くの集落の一角を構成したものであったと考えられます。

このような貴重な遺跡の調査内容をまとめました本書が、文化財の保護や地域の歴史などの普及啓発に、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました地権者および関係者の方々、そして寒暖なく作業に従事いただきました地元の皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

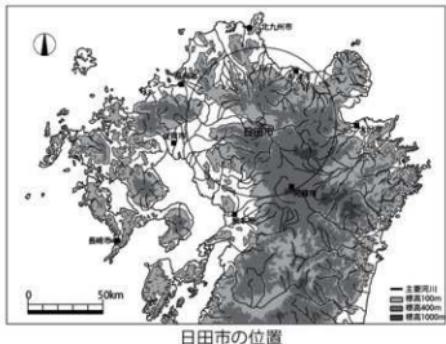
平成27年3月

日田市教育委員会教育長

三筈 真治郎

例　　言

1. 本書は、市土木課が平成9～11年度に計画・実施した地方道改修事業（市道田島有田線バイパス改良工事）に伴い平成10年度に実施した、長迫遺跡C地点の発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては、市土木課、地権者、工事関係者、大分県教育委員会および地元の方々にご協力をいただいた。
3. 本書に掲載した遺構実測図は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託したもののはかは調査担当者が行い、現場での写真撮影は調査担当者が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム（一部、大分支店）、株式会社九州文化財総合研究所に委託し、製図は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、その成果品を使用した。遺構図は高田美保（日田市文化財保護課整理作業員）の協力を得たもののはか調査担当者が行った。
5. 空中写真撮影は株式会社スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。
6. 遺物の写真撮影は、若杉が行った。
7. 挿図中の方位はすべて磁北であり、文中の方位角も磁北で示している。
8. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
9. 本書の執筆・編集は若杉が行った。



本文目次

I	調査の経過	
(1)	調査に至る経緯	1
(2)	発掘作業の経過	1
(3)	整理等作業の経過	2
II	遺跡の位置と環境	3
III	調査の内容	
(1)	調査の概要	7
(2)	遺構と遺物	7
1.	竪穴建物	7
2.	掘立柱建物	33
3.	土坑	38
4.	溝状遺構	39
5.	その他の遺物	39
IV	総括	43

挿図目次

第1図	調査地位置図 (1/5,000)	2	第15図	5～9号竪穴建物	
第2図	周辺遺跡分布図 (1/20,000)	4		出土遺物実測図 (1/4)	14
第3図	遺構配置図 (1/300)	5～6	第16図	10及び11・37号竪穴建物	
第4図	1号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	7	第17図	12号竪穴建物カマド実測図 (1/40)	16
第5図	2号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	8	第18図	13号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	16
第6図	1・2号竪穴建物 出土遺物実測図 (1/4)	9	第19図	10～13号竪穴建物 出土遺物実測図 (1/4)	17
第7図	3号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	10	第20図	15号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	18
第8図	3号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)	10	第21図	16・17号竪穴建物実測図 (1/80)	19
第9図	4号竪穴建物実測図 (1/80)	11	第22図	18号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	19
第10図	4号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)	11	第23図	19・20号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	20
第11図	5・6号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	12	第24図	14～20号竪穴建物 出土遺物実測図 (1/4)	21
第12図	7号竪穴建物実測図 (1/80・1/40)	13	第25図	23号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	22
第13図	8号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80・1/40)	13			
第14図	9号竪穴建物実測図 (1/80)	14			

第 26 図 24 号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80、1/40) ······	22	第 40 図 53 号竪穴建物実測図 (1/80) ······	32
第 27 図 25 号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80、1/40) ······	23	第 41 図 44 ~ 53 号竪穴建物 出土遺物実測図 (1/4) ······	33
第 28 図 21・24・25 号竪穴建物 出土遺物実測図 (1/4) ······	24	第 42 図 1・2 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	34
第 29 図 26 号竪穴建物実測図 (1/80) ······	25	第 43 図 3 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	35
第 30 図 28 ~ 32 号竪穴建物実測図 (1/80) ······	26	第 44 図 4 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	35
第 31 図 33 号竪穴建物実測図 (1/80) ······	27	第 45 図 5・6 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	36
第 32 図 34・35・47・48 号 竪穴建物実測図 (1/80) ······	27	第 46 国 7 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	36
第 33 国 36 号竪穴建物実測図 (1/80) ······	28	第 47 国 8 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	37
第 34 国 38・39・49 号竪穴建物実測図 (1/80) ······	28	第 48 国 9・10 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	37
第 35 国 39 号竪穴建物カマド実測図 (1/40) ······	28	第 49 国 11 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	38
第 36 国 40・42 ~ 44 号 竪穴建物実測図 (1/80) ······	29	第 50 国 12 号掘立柱建物実測図 (1/80) ······	38
第 37 国 29 ~ 43 号竪穴建物 出土遺物実測図 (1/4) ······	30	第 51 国 1・2 号土坑実測図 (1/40) ······	38
第 38 国 45・46・54 号 竪穴建物実測図 (1/80) ······	31	第 52 国 溝状遺構・土坑・ピット、 その他の出土遺物実測図 (1/4) ······	40
第 39 国 51 号竪穴建物及び カマド実測図 (1/80、1/40) ······	31	第 53 国 出土石器実測図 (1/3) ······	41
		第 54 国 出土石器及び その他の遺物実測図 (1/3・1/2) ······	42

図版目次

- 巻頭写真図版 長道遺跡 C 地点全景（南から）
- 写真図版 1 上 調査区北側空中写真（東から）
下 調査区南側空中写真（東から）
- 写真図版 2 1 ~ 3・5・6・23・51 号竪穴建物
- 写真図版 3 6・8・9・12・13・25・26 号竪穴建物
- 写真図版 4 14 ~ 22 号竪穴建物
- 写真図版 5 20・24・25・30 ~ 39 号竪穴建物
- 2 号掘立柱建物
- 写真図版 6 32・34・35・38 ~ 40
42・44 ~ 46・51 号竪穴建物
- 写真図版 7 44・46・51・53 号竪穴建物
1・3・5・6 号掘立柱建物
- 写真図版 8 7 ~ 11 号掘立柱建物、1 号土坑
- 写真図版 9 ~ 11 出土遺物

本文写真目次

- 本文写真 1 作業風景① ······ 2
- 本文写真 2 作業風景② ······ 2

表目次

- 第 1 表 求来里川流域の遺構変遷表 ······ 43
- 第 2 表 出土土器観察表 (1) ······ 44
- 第 3 表 出土土器観察表 (2) ······ 45
- 第 4 表 出土土器観察表 (3) ······ 46
- 第 5 表 出土土器観察表 (4) ······ 47
- 第 6 表 出土石器・石製品・土製品観察表 ······ 47

I 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

本調査の原因となった、市道田島有田線改良工事は、日田市東部の有田地区と市街地を結ぶ延長約1,600mの幹線道路として計画され、平成7年度から事業が開始された。この事業実施に先立ち、市土木課から市教育委員会（市教委）に対し、埋蔵文化財の所在の有無についての文書が提出された。これを受けた市教委では、計画路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地が存在することから、その取り扱いについては十分協議を行う旨を回答した。その後、分布調査及び予備調査を実施し、7ヶ所の遺跡を調査対象とし、平成9・10年度に発掘調査を実施した。そのうち、本書で報告する長追遺跡C地点については、平成10年4月17日に調査に着手し、同年9月6日に終了した。詳細は、既報告を参照されたい（註）。

なお、発掘調査の関係者は以下のとおりである（職名・所属名は当時のまま）。

平成10年度／発掘調査

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査事務 原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同課長補佐兼文化財係長）

森山一宏（同主任）、竹原里香（同臨時職員）

調査担当 吉田博嗣（同主任）

調査員 土居和幸（同主任）、行時志郎（同主任）、永田裕久（同主事補）、森山敬一郎（同嘱託）

発掘作業員 稲本文雄、秋ヤエ子、秋吉タミエ、秋吉ミユキ、安心院司、安達義男、穴井和馬、諫山三代子

石井貞美、石井正行、石田スズ子、伊藤キヨ子、猪熊忠孝、猪熊ヨネ、宇野京子、江藤キミ子

桂隈典子、桂隈マサ子、桂隈政子、小野忠臣、小野多美子、鍛治谷アサヨ、鍛治谷節子

梶原秋生、梶原サツ子、梶原利徳、河部克己、蒲池妙子、五藤カツ子、五島勇美子、小下一

五反田静子、後藤孝市、財津歎子、財津静子、財津真弓、財津利枝、財津由太、佐藤カスミ

佐藤キクエ、坂本今朝人、坂本都美子、左原英子、島田隆幸、島田松之助、清水忠造、庄内武子

菅田クマエ、菅田初夫、菅田ミヤ子、園田光子、園田義雄、高倉厚巳、高倉ハナ子、高倉富美子

高倉美津子、高倉美利、高野曜、高村笑美子、武内アイ子、田中 真、津江久徳、手嶋トシエ

長尾伸也、中島カズ子、中島ツネ子、中島トミエ、中野ヨシ子、新村治美、仁田坂シズエ

野村勉、野村義子、長谷部喜吉、本田忠勝、本田早苗、益永勇、松岡初次、松本トキエ

横尾フサエ、吉長ハルエ、吉弘昇、渡邊芳五郎

来訪者 坂本嘉弘、渋谷忠章（大分県文化課）高橋徹（大分県立歴史博物館）

(2) 発掘作業の経過

発掘作業は、平成10年4月17日に着手した。調査の主な流れは以下のとおりである。

4月17日 重機による表土剥ぎ開始

4月20日 遺構検出開始

5月15日 遺構掘下げ開始

7月4日 遺構実測開始

9月4日 空中写真撮影実施

9月6日 器材撤収、調査終了

(3) 整理等作業の経過

整理等作業は、調査終了後の平成10年10月より開始し、平成12年4月に終了した。この間、整理が終了した遺物については、実測業務として委託している。各年度の作業内容及び整理作業員については、次のとおりである。

平成10～11年度 遺物整理・遺物実測

平成12年度 遺物実測

平成24～26年度 遺物実測・製図・写真撮影

遺構製図、報告書作成

整理作業員 穴井こずえ、石松裕美、伊藤一美

伊藤弘子、宇野富子、鍛治谷節子

梶原ヒトエ、川原君子、黒木千鶴子

酒井貴代美、坂本和代、武石和美

中原琴枝、平川優子、安元百合

なお、平成24～26年度の報告書作成に伴う整理等作業及び報告書刊行については、市の単独事業である埋蔵文化財発掘調査報告書作成事業により予算化し、実施した。

また、報告書刊行を実施した平成26年度の体制は次のとおりである

平成26年度／報告書刊行

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄（～6月）、三咲眞治郎（7月～）（日田市教育委員会教育長）

調査事務 財津俊一（日田市教育府文化財保護課長）、園田恭一郎（同埋蔵文化財係長）

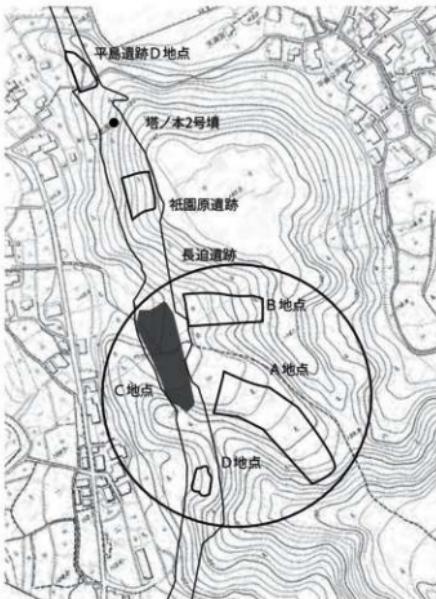
諫山温子（同主事）

報告書担当 若杉竜太（同主査）

調査員 行時桂子、渡邊隆行（同主査）、上原翔平（同主任）

（註）行時志郎『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998

若杉竜太ほか編『平島遺跡D地点、塔ノ本古墳、紙園原遺跡2次、長迫遺跡C地点、長迫遺跡D地点、尾瀬遺跡6次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 日田市教育委員会 2001



第1図 調査地位置図 (1/5000)



写真1 作業風景①



写真2 作業風景②

II 遺跡の位置と環境

大分県西部、筑後川上流域に位置する日田市は、標高 80 m 前後の沖積地に広がる市街地の周囲を標高約 150 m の阿蘇溶岩台地が巡り、その外周に標高 200 ~ 600 m の耶馬溪溶岩台地が、市の境界域には 700 ~ 1,000 m 級の山々が連なって盆地の景観を形成する。この山々を源とする大小の河川は溶岩台地の合間に縫って沖積地へ流れ込み、南流する花月川や西流する玖珠川などが合流して筑後川となり有明海へ注ぐ。

長迫遺跡のある有田塚ヶ原遺跡群は盆地東部の大字東有田に属し、花月川支流の有田川と求来里川が合流する東側に立地する。有田地域はいわゆる「盆地」内とは文化圏を異にし、近世期日田盆地が江戸幕府の直轄地であった頃には東隣の森藩（玖珠）領となっていた地域である。有田塚ヶ原遺跡群の各遺跡は阿蘇溶岩台地を中心に立地しており、全体的には急な斜面部が多く見られる。このような遺跡の立地条件は盆地周辺部では一般的であり、台地上には弥生時代などの古い集落や古墳が造られ、時代が下がるにつれて谷部や小冲積地などに集落が広がっていく傾向がある。長迫遺跡はこのような地勢の谷部斜面に営まれている。

この有田塚ヶ原遺跡群においては、鉄器や装身具類など多数の副葬品が出土した大規模な墓地である平島横穴墓群（29）、繩文時代早期の集石と古墳時代～古代の集落跡が見つかった石ヶ迫遺跡 A・B 地区（27・28）、古代の鍛冶に関する遺構・遺物が発見されたカブリ遺跡（31）、繩文時代の落し穴と古代の建物群が見つかった有田塚ヶ原遺跡（32）、弥生～古墳時代の集落跡と 50 基を超える近世墓群からなる祇園原遺跡（25）、凝灰岩の箱式石棺を主体部とする古墳時代中期の円墳である尾瀬 2 号墳（30）が調査されている。

有田塚ヶ原遺跡群のある有田地区や、求来里川流域で南に隣接する求来里地区では、近年大規模な圃場整備などに起因する発掘調査が数多く実施されており、そのなかから長迫遺跡の主な時代となる古墳時代～古代の遺跡に的をしぼってみる。長迫遺跡のある丘陵の北側起きには、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする塔ノ本 2・3 号墳（22）や同 1 号墳が存在していた（現在は消滅または一部消滅）。これらの古墳群の北側の丘陵裾部には、市指定史跡の円墳である平島古墳（23）や、弥生時代後期の環濠集落のほかに古墳時代後期の集落が確認された平島遺跡（21・24）がある。長迫遺跡から求来里川の谷に下った沖積地にある尾瀬遺跡（33）では、弥生～古墳時代の集落が見つかっている。対岸の丘陵には古墳時代の石棺墓や石蓋土坑墓などで構成された墓地群である大迫遺跡（19）や、3 基の円墳からなる中尾古墳群（18）がある。

長迫遺跡から求来里川を南に約 900 m 上った位置には、平安時代の竪穴遺構が確認された森ノ元遺跡（36）、さらにもう少し遡った有田地区と求来里地区的境界付近の丘陵には、古墳時代の集落や古代の土坑墓が見つかった馬形遺跡（37）、その東側対岸の丘陵には、横穴式石室を主体とする 3 基の円墳からなるガニタ古墳群（38）がある。

ここからさらに求来里川を遡った求来里地区も古墳時代の遺跡が多く確認されており、金田遺跡（40）・町ノ坪遺跡（42）・求来里平島遺跡（45）・名里遺跡（46）では、古墳時代の中でも時期が下がるにつれて求来里川の上流すなわち谷の奥に向かって集落域が拡大する様子が明らかとなっている。特に金田・町ノ坪の両遺跡の古墳時代中期の集落では朝倉産の初期須恵器や朝鮮半島系土器が出土しており、地床がからカマド導入期の集落変遷を追うことができる。このほかにも、求来里川右岸の丘陵には円墳の亀ノ甲古墳（43）、左岸の台地上には古墳時代後期の石蓋土坑墓が見つかった元宮遺跡（41）などが立地しており、求来里川流域は古墳時代の遺跡の密集地ともいえる。

《参考文献》

千田 翼「日田・玖珠地域の地形ーとくに台地地形についてー」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』 大分大学教育学部

行時志郎編『有田塚ヶ原遺跡群』 日田市教育委員会 1999

『平成4年度(1992)~23年度(2011)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1994~2012

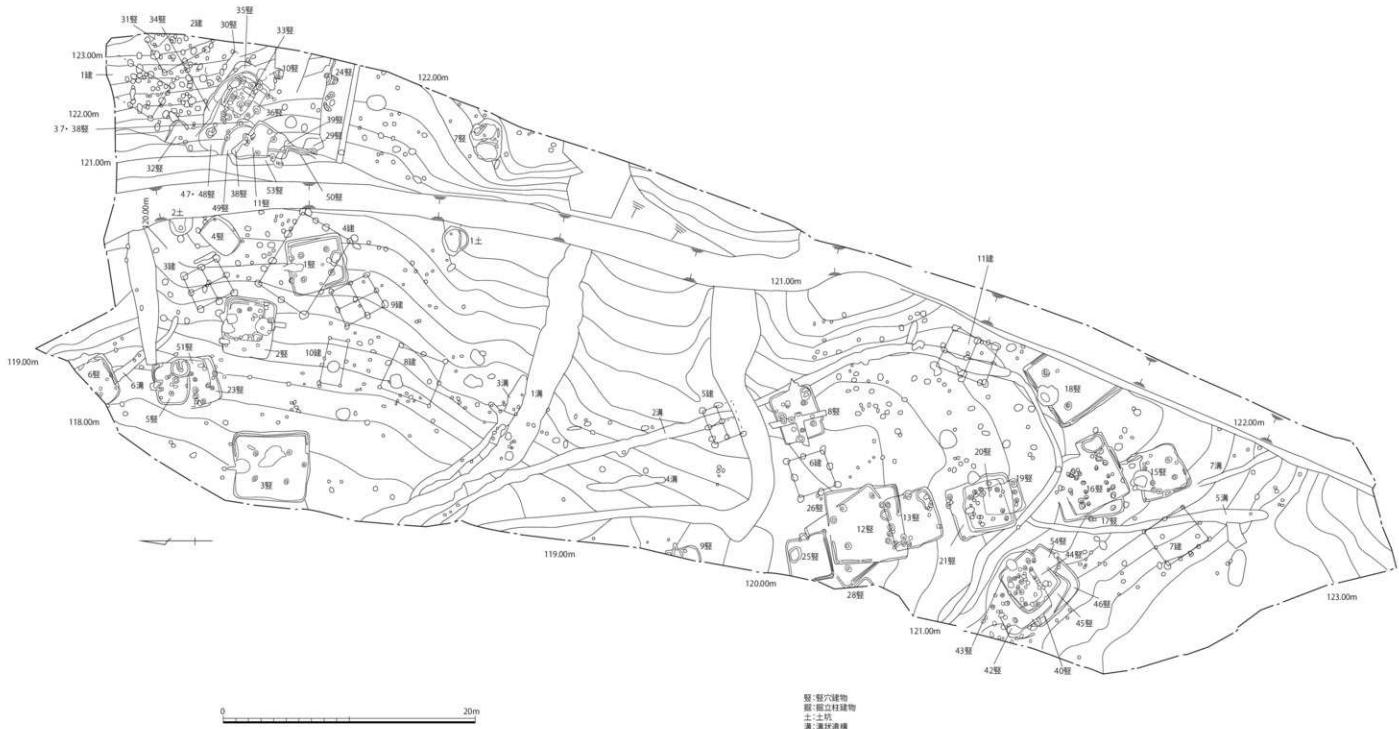
『日田市史』 日田市 1990 / 各遺跡の発掘調査報告書 ほか



1 慶般山遺跡	9 夕田横穴墓群	17 宮ノ下遺跡臺	25 犬園原遺跡	33 有田塚ヶ原遺跡	41 小西遺跡
2 丸山古墳臺	10 夕田古墳	18 中尾古墳群臺	26 長迫遺跡A・B地点	34 尾浦遺跡	42 金田遺跡
3 赤追遺跡	11 佐寺横穴墓群	19 大迫遺跡	27 長迫遺跡C地点	35 尾浦1号墳	43 元宮遺跡
4 大波羅遺跡	12 佐寺遺跡	20 中尾原遺跡	28 石ヶ迫遺跡A地区	36 有田塚ヶ原古墳群	43 町ノ坪遺跡
5 葛葉堂山古墳	13 内ノ下遺跡	21 平島遺跡E地点	29 石ヶ迫遺跡B地点	37 森ノ元遺跡	44 亀ノ甲古墳臺
6 丸尾神社古墳	14 川原田遺跡	22 塔ノ木1号墳	30 平島横穴墓群	38 馬形遺跡	45 町野原遺跡臺
7 北向古墳臺	15 佐寺原遺跡	23 平島古墳臺	31 尾浦2号墳	39 ガニタ古墳群臺	46 求来里平島遺跡
8 法恩寺山古墳群	16 堂園遺跡	24 平島遺跡A~C区	32 クビリ遺跡	40 小西遺跡	47 名里遺跡

*は周知遺跡であるが、これまでに発掘調査例がないもの。

第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)



第3図 遺構配図 (1/300)

III 調査の内容

(1) 調査の概要

本遺跡の調査で確認された遺構は、竪穴建物 54 軒、掘立柱建物 12 棟、土坑 2 基、溝状遺構 7 条のほか、多数のピットである。調査区は南から北に向かって緩やかに傾斜する地形で、標高は凡そ 119 ~ 123 m である。確認された遺構は、大きく調査区の北側と南側に分かれている。以下、遺構ごとにみていく。

なお、本報告作成にあたり整理をしていくなかで、記録が詳細に取られていなかったり、実測図が存在していない遺構もあったことから、記録として提示できるものを掲載している。なお、詳細が不明な遺構は 12・14・21・22・27・41・50・52 号竪穴建物と 1 ~ 7 号溝状遺構である。遺構配置図から規模は判明できるものは概数で示し、位置や詳細が不明なものは記述していない。

また、数軒の切り合った建物が同一の実測図となっているものがあるため、遺構番号順に記述しない場合があることも付け加えておく。なお、建物実測図の網部分は焼土を示すが、その量が多い部分を濃く、少ない部分を薄くは表現している。

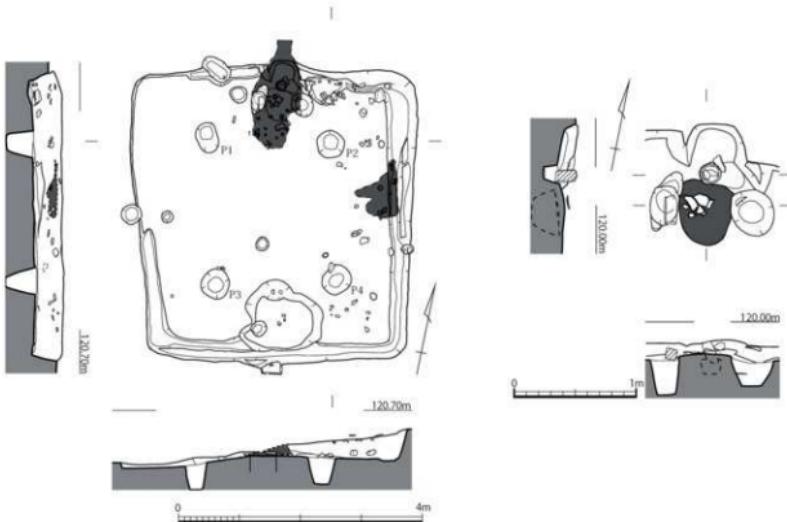
この他、出土遺物については遺構番号順とし、種別・器種のみの記述とした。詳細は第 2 ~ 6 表の遺物観察表を参照されたい。

(2) 遺構と遺物

1. 竪穴建物

1号竪穴建物（第 4 図 図版 2）

この建物は、調査区の北東側で確認され、4 号掘立柱建物に切られる。平面形は、ほぼ正方形を呈する。規模は南北軸約 4.6 m、東西約 4.7 m で、床面までの深さは約 45 cm を測る。床面には、北西側を除き、壁際溝が掘



第 4 図 1号竪穴建物及びカマド実測図 (1/80・1/40)

りこまれ、南側には土坑が見られる。床面に確認されたピットのうち、P 1～P 4が主柱穴になると考えられる。柱穴の深さは、床面から約 40～50 cmである。

また、カマドは北壁の中央付近に付設されている。突出部ではなく、煙道の痕跡は確認されなかった。袖は両方とも大きく破壊されており、袖石の抜き取り痕とみられるピットが左右ともに確認された。このピットの位置関係から推定されるカマドの規模は左袖が長さ 80 cm、右袖が長さ 50 cm、袖間の幅は奥壁側で約 40 cm、袖の手前側で約 70 cmを測る。ピットの内側には、火床面が見られる。

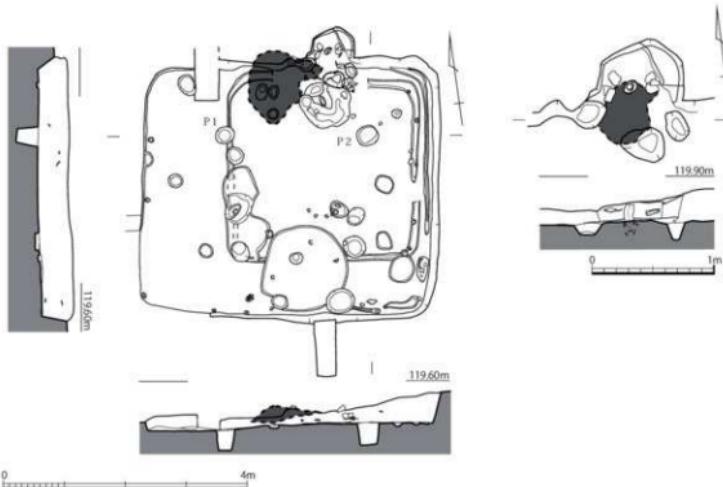
遺物は須恵器壺蓋や土師器の壺、甕、高壺、甑が出土している。

2号竪穴建物（第5図 図版2）

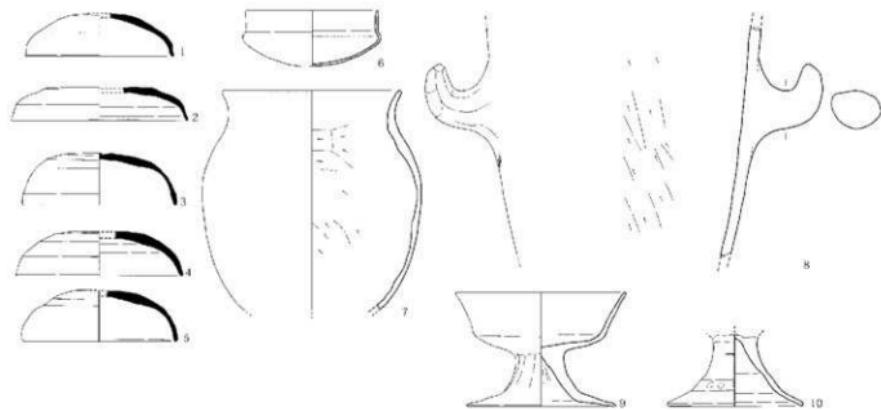
この建物は、調査区北側の中央付近で確認され、新旧2軒の建物がからなるとみられる。新旧2軒ともに平面形は、方形を呈し、旧建物がより正方形に近い。規模は旧建物が南北軸約 3.0 m、東西約 3.1 mで、床面までの深さは約 50 cmを測る。床面には、他の遺構に切られた南西側を除いて、壁際溝が掘りこまれている。床面には数個のピットが確認されているが、主柱穴と断定できるものはなかった。また、カマドは北壁の中央付近に付設されていたと思われるが、詳細は不明である。

新建物の規模は南北軸約 4.1 m、東西約 4.8 mで、床面までの深さは約 20～40 cmを測る。床面には東側と南側の一部で壁際溝が掘りこまれる。床面に確認されたピットのうち、少なくとも P 1、P 2が主柱穴になると考えられ、深さは 30～40 cmを測る。カマドは北壁中央よりやや東寄りに付設されていたと思われるが、詳細は不明である。

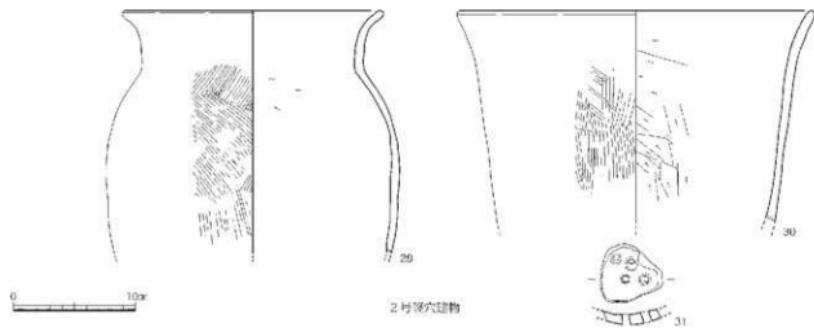
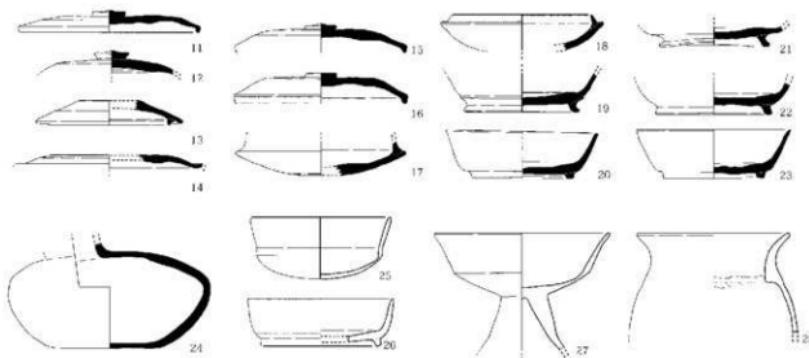
遺物は須恵器蓋壺や蓋、壺、平瓶、土師器の壺、甕、高壺、甑が出土している。



第5図 2号竪穴建物及びカマド実測図（1/80・1/40）



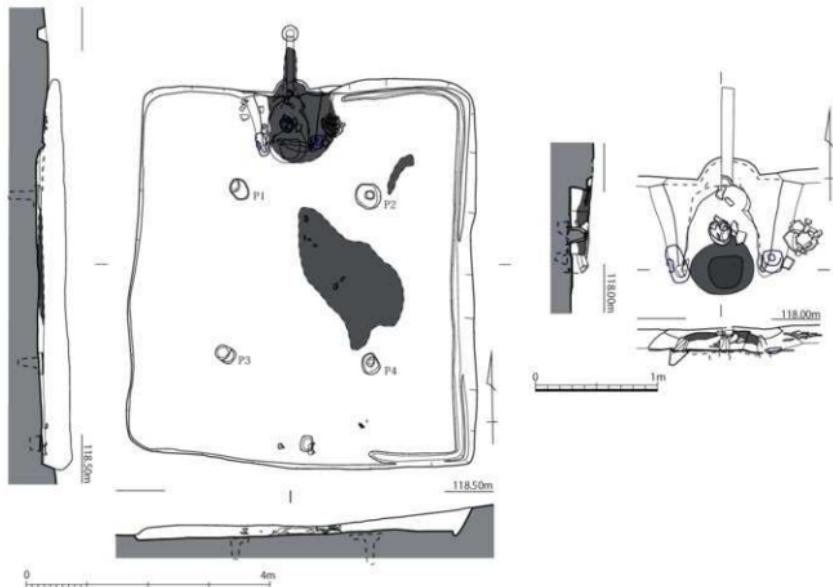
1号竪穴建物



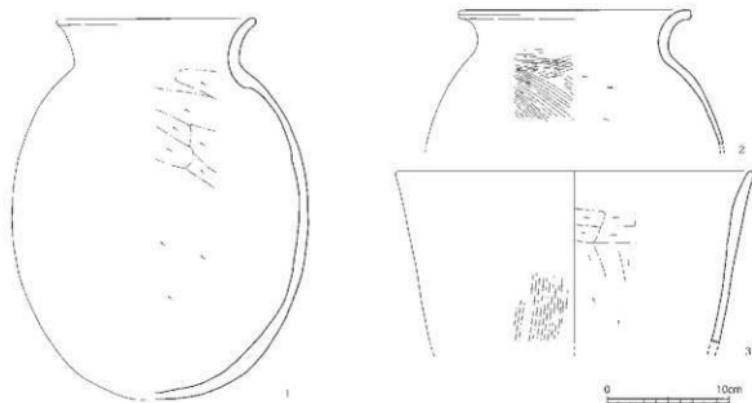
第6図 1・2号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

3号竪穴建物（第8図 図版2）

この建物は、調査区の北西側で確認された。平面形は方形を呈し、規模は南北軸約6.3m、東西軸約5.6m、床面までの深さは約50cmを測る。床面には、北東側・南東側の一部に壁際溝が掘りこまれ、南側には土坑が見られる。床面に確認されたピットのうち、P1～P4が主柱穴になると考えられる。柱穴の深さは、床面から約



第7図 3号竪穴建物及びカマド実測図 (1/80・1/40)



第8図 3号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

30～50 cmである。

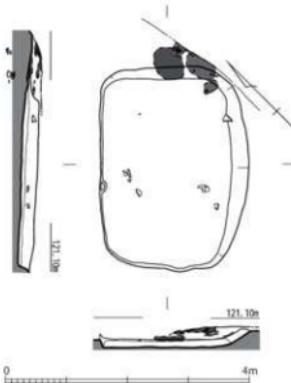
また、北壁の中央付近にカマドが付設されており、煙道が壁の外に伸びる。煙道は長さ約60 cmを測り、煙出し口のピットの径は約20 cmである。また両袖とその袖石及び支脚が残存していた。両袖の間には火床面が見られた。カマドの規模は左袖が長さ80 cm、右袖が長さ80 cm、袖間の幅は奥壁側で約40 cm、袖の手前側で約60 cmを測る。なお、煙道までを含めた長さは約2.1 mとなる。

遺物は土師器甕・瓶などが出土している。

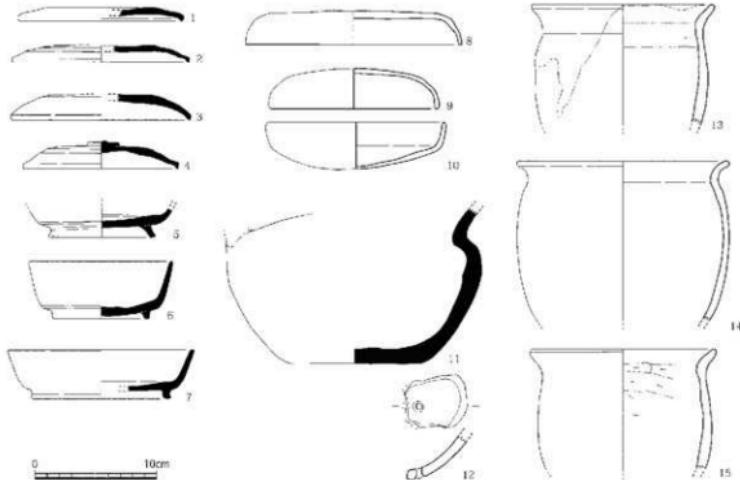
4号竪穴建物（第9図）

この建物は、調査区北側の中央付近、2号竪穴建物の東側で確認された。平面形は長方形を呈し、規模は北西-南東軸約3.0 m、北東-南西西約4.2 mで、床面までの深さは約40 cmを測る。床面には、ピットや壁際溝は確認されなかった。また、北東壁際には焼土が見られた。袖や袖石の抜き取り痕などカマドの痕跡を示すものはなかったものの、その可能性は考えておきたい。

遺物は須恵器の蓋・环、土師器の蓋・环・甕などが出土している。



第9図 4号竪穴建物実測図 (1/80)



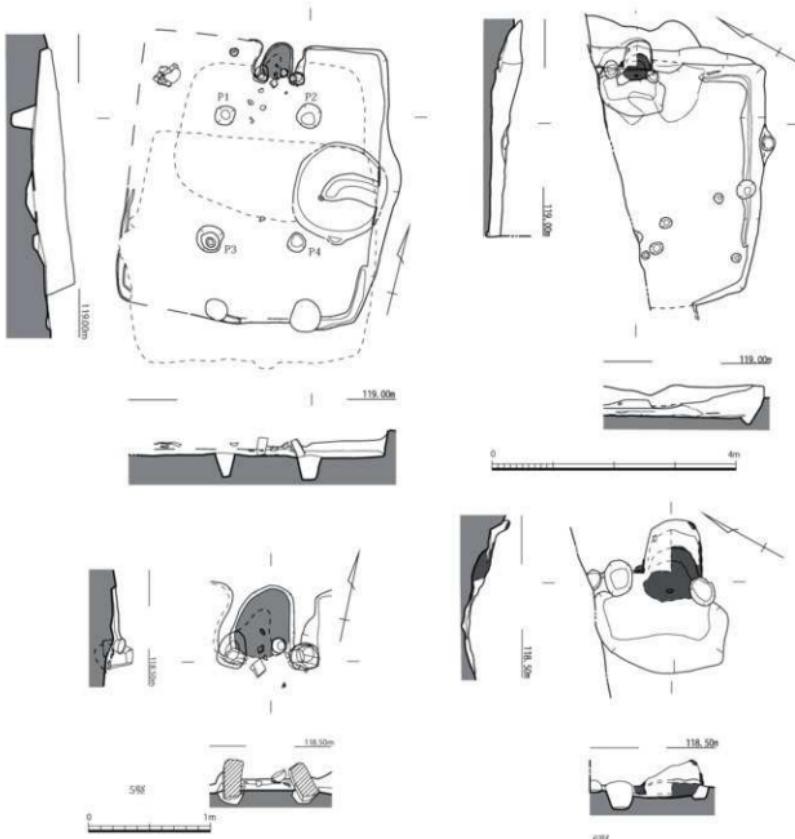
第10図 4号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

5号竪穴建物（第11図 図版2）

この建物は、調査区北側の3号竪穴建物の北東側で確認され、23・51号竪穴建物を切る。平面形は方形を呈し、規模は南北軸約4.5m、東西軸約4.4m、床面までの深さは約40cmを測る。床面には南東側の一部に壁際溝が掘り込まれる。このほか、4個のピットが確認されており、これが主柱穴になると考えられる。主柱穴の深さは、床面から約30～40cmである。

また、北壁の中央付近にカマドが付設されている。煙道の突出部は見られない。両袖とその袖石が残存しているが、支脚は確認されなかった。両袖の間には火床面が見られた。カマドの規模は左袖が長さ60cm、右袖が長さ55cm、袖間の幅は奥壁側で約30cm、袖の手前側で約35cmを測る。

遺物は須恵器壺、土師器壺・甕・瓶が出土している。



第11図 5・6号竪穴建物及びカマド実測図 (1/80・1/40)

6号竪穴建物（第11図 図版2・3）

この建物は、調査区の北端の5号竪穴建物の北側で確認され、6号溝状遺構を切る。平面形は方形を呈するのみられるが、北西側は調査区外へ広がる。調査区内での規模は北東-南西軸約4.2m、北西-南東軸約2.6m + α、床面までの深さは約50cmを測る。床面には北東側に壁際溝が掘りこまれる。また、数個のピットが確認されたが、主柱穴になると判断できるものはなかった。

また、カマドは壁の東の角から約2.0mの北東壁に付設され、突出部がわずかに見られる。明確に袖はないものの、石臼の抜き取り痕とみられるピットが確認された。このピットの間には火床面が見られた。カマドの規模は主軸部分で長さ65cm、このピットから推定される袖間の幅は奥壁側で約40cm、袖の手前側で約50cmを測る。

遺物は須恵器壺蓋・壺、土師器甕が出土している。

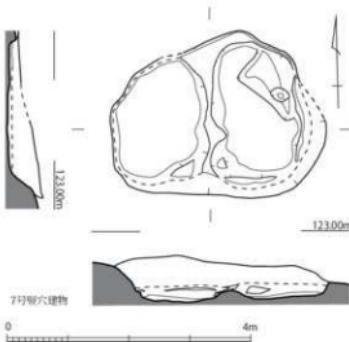
7号竪穴建物（第12図）

この建物は、調査区東側で確認された。平面形は不定形である。規模は南北軸約2.6m、東西軸約3.0m、床面までの深さは約60cmを測る。前回の報告でも建物として、報告されているが、壁際溝や主柱穴、カマド等は確認されていない。

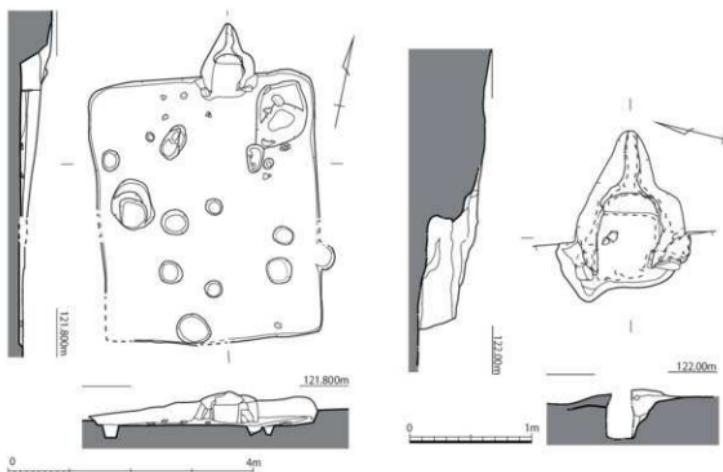
遺物は須恵器蓋壺、土師器甕・高環が出土している。

8号竪穴建物（第13図 図版3）

この建物は調査区の中央付近で確認され2号溝状遺構を切る。平面形は方形を呈し、規模は北西-南東軸で約3.6m、北東-南西軸で約4.2m、床面までの深さは約30cmを測る。床面にはピットが数個検出されたが、主



第12図 7号竪穴建物実測図（1/80）



第13図 8号竪穴建物及びカマド実測図（1/80・1/40）

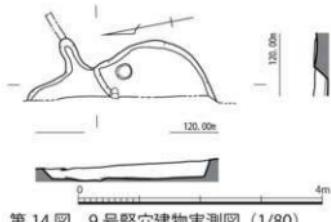
柱穴と判断できるものはなかった。

また、カマドが東壁の中央付近より、やや南寄りに付設され、煙道の突出部が見られる。両袖とその袖石とみられる石が残存していたが、支脚は確認されなかった。カマドの規模は左袖が長さ25cm、右袖が長さ30cm、袖間の幅は奥壁側で約45cm、袖の手前側で約50cmを測る。また、煙道までを含めた長さは約1.3mなる。

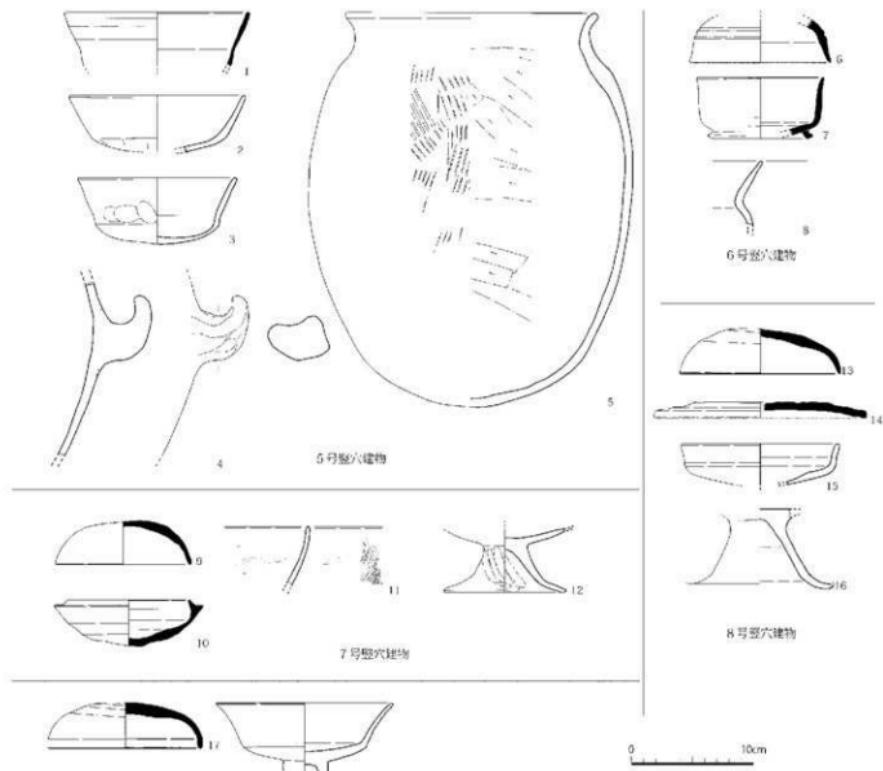
遺物は須恵器环蓋・蓋、土師器环・高环が出土している。

9号竪穴建物（第14図 図版3）

この建物は調査区中央の西壁際で確認された。平面形は方形



第14図 9号竪穴建物実測図 (1/80)



第15図 5～9号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

を呈するとみられるが、西側は調査区外へ広がる。調査区内での規模は南北軸約2.9m、東西軸約6.5m+α、床面までの深さは約20cmを測る。

東壁中央付近には、カマドの煙道の可能性がある突出部が見られるが、袖や袖石、火床面などカマドであることを示すものは確認されていない。

遺物は須恵器壺蓋・土師器高环が出土している。

10号竪穴建物（第16図）

この建物は、調査区北東側で確認された。大きく削平を受けているため、北壁側の一部しか残存していないかった。平面形については、他の建物の状況から、方形を呈すると考えられる。推測される規模は、北壁側で約4mである。

この北壁にカマドが付設されていた。カマドの詳細な状況は不明であるが、火床面とみらえる焼土や袖の一部が残存している。規模は、長さ約40cm、幅約70cmである。

遺物は、須恵器蓋・环・土師器蓋・环・椀が出土している。

11・37号竪穴建物（第16図）

これらの建物は、調査区北東側で確認され、2軒が切り合うが、前後関係は不明である。西側は搅乱により削平されており、11号竪穴建物は、焼土の一部が残っているのみで、カマドであった可能性がある。

37号竪穴建物は、平面形は方形を呈るとみられ、規模は南東壁が約2.1m、北東壁が約1.8m、検出面からの深さは約10cmを測る。床面には、主柱穴と判断されるようなピットや壁際溝は確認されなかった。

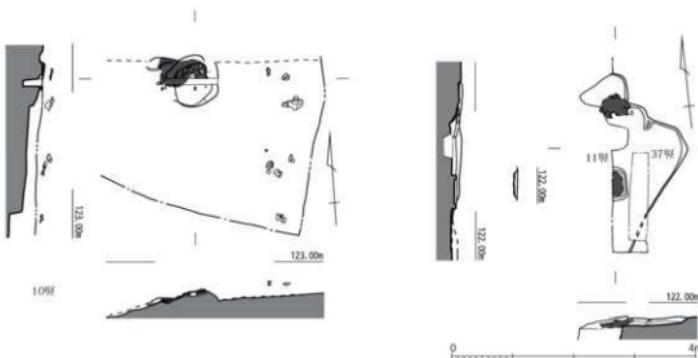
また、北東壁において、カマドと見られる突出部と焼土が確認された。袖石や支脚、及びその抜き取り痕を示すピットは検出されなかった。確認できたカマドの規模は、長さ約70cmである。

遺物は、11号竪穴建物から須恵器壺身・土師器环、37号竪穴建物から須恵器甕が出土している。

12号竪穴建物（第17図 図版3）

この建物は、調査区南西側で確認され、26号竪穴建物を切り、13号竪穴建物に切られる。平面形は方形を呈し、規模は南北軸約6.3m、東西軸約6.3mを測る（個別実測図がないため、遺構配置図より計測、深さ不明）。

また、北壁の中央付近でカマドが付設されていた。袖や袖石・支脚は残っていなかったものの、袖石の抜き取



第16図 10及び11・37号竪穴建物実測図 (1/80)

り痕が検出され、その内側には火床面がみられた。カマドの規模は、袖石間の幅で約 55 cm を測る。

遺物は、須恵器長頸壺・土師器環・甕が出土している。

13号竪穴建物（第 18 図 図版 3）

この建物は、調査区中央よりやや南寄りで確認され、12号竪穴建物を切る。平面形は方形を呈し、規模は西壁側で約 4.1 m、東西軸約 4.7 m、床面までの深さは約 30cm を測る。床面には東側から南側にかけて、壁際溝が掘りこまれる。また、数個のピットが確認されたが、主柱穴と判断できるものはなかった。

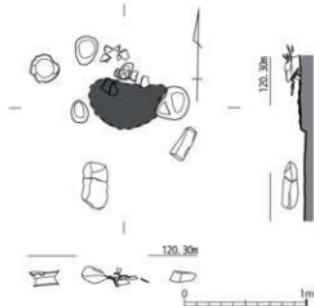
カマドは東壁の中央付近に付設され、突出部がわずかに見られる。袖は左袖の一部が残っているのみで、支脚や袖石、その抜き取り痕等は確認されなかった。カマドの規模は左袖部分で約 50 cm を測る。

遺物は須恵器蓋・环、土師器甕・环が出土している。

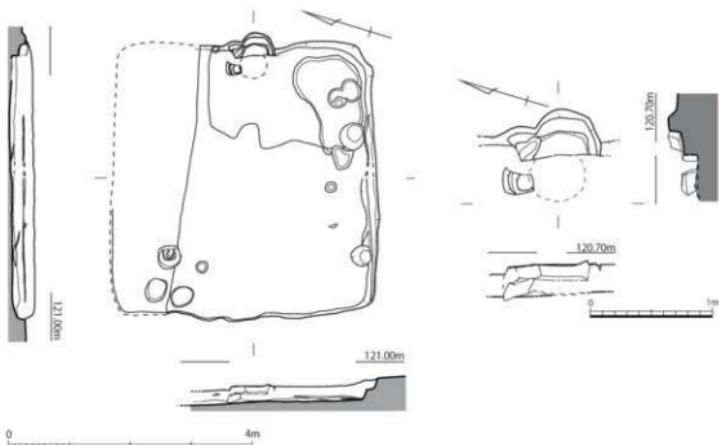
15号竪穴建物（第 20 図 図版 4）

この建物は、調査区の南側で確認された。平面形はやや歪な方形を呈し、北東側に溝状に伸びる部分がみられる。規模は東西軸約 4.2 m、西壁側約 4.3 m、東壁側は溝状部分を含め約 4.3 m である。検出面からの深さは約 20cm を測るが、東側はほとんど削平を受けている。床面には南西側付近に壁際溝が掘り込まれる。また、床面で確認されたピットのうち、その位置関係や深さから P 1 ~ P 4 が主柱穴になるとみられる。

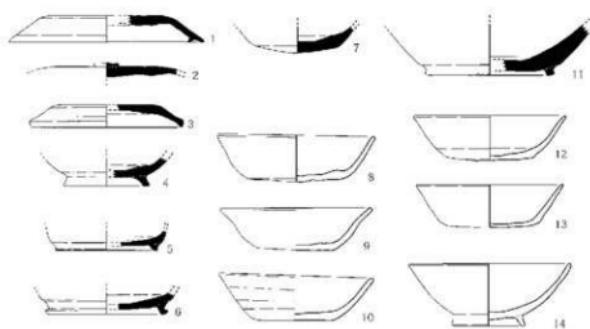
カマドは北壁の中央付近に付設され、突出部はほとんど見られない。袖は完全になくなっているが、袖石、支脚に加え、天井石も残存していた。天井は上面からの力でほぼ真っ二つに割れていた。袖がなくなっている状況



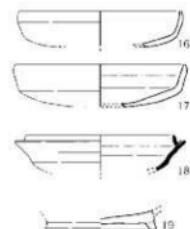
第 17 図 12 号竪穴建物カマド実測図 (1/40)



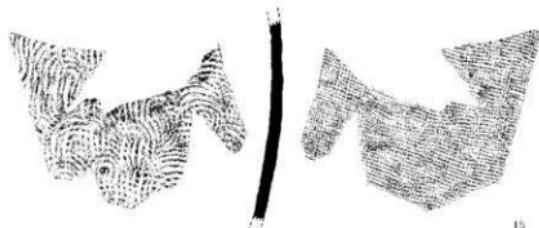
第 18 図 13 号竪穴建物及びカマド実測図 (1/80・1/40)



10号竪穴建物

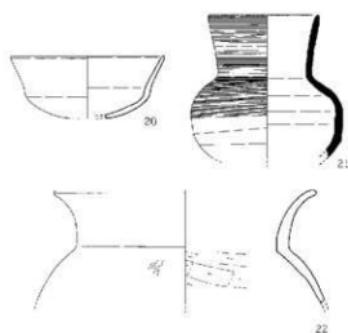


11号竪穴建物

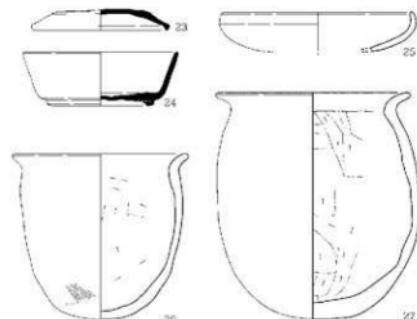


10号竪穴建物

0 10cm

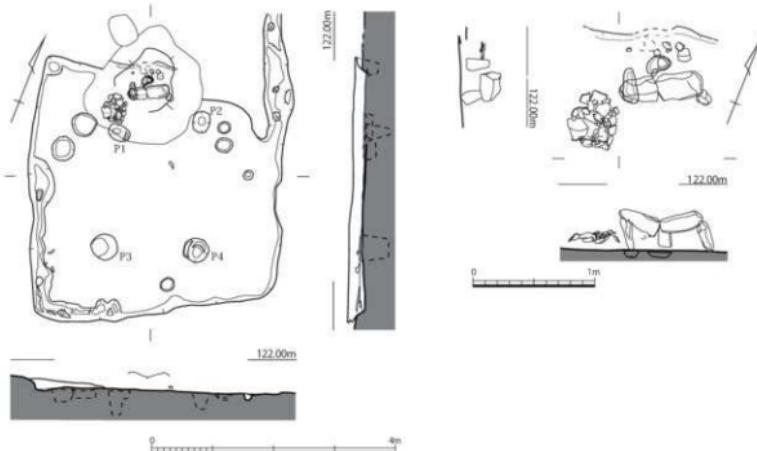


12号竪穴建物



13号竪穴建物

第19図 10～13号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)



第20図 15号竖穴建物及びカマド実測図 (1/80・1/40)

やカマドの左手前に甕の破片が散乱した状況などから、祭祀行為が行なわれた可能性がある。カマドの規模は、袖石の位置から左袖が約55cm、右袖が約50cmと推定され、袖間の幅は袖石側で約50cmを測る。

遺物は、須恵器壺蓋、土師器甕が出土している。

16・17号竖穴建物（第21図 図版4）

この建物は、15号竖穴建物の北側で確認され、16号竖穴建物が17号竖穴建物を切る。平面形は2軒ともに方形を呈する。16号竖穴建物の規模は、北西-南東軸約5.1m、北東-南西軸約5.8m、検出面からの深さは約30cmを測る。床面には多くのピットが確認されたが、位置関係や深さからP1～P3は主柱穴になるとみられ、床面からの深さは約50cmを測る。17号竖穴建物の規模は、西壁側で約5.2m、南壁側で約5.4m、検出面からの深さは約20cmを測る。

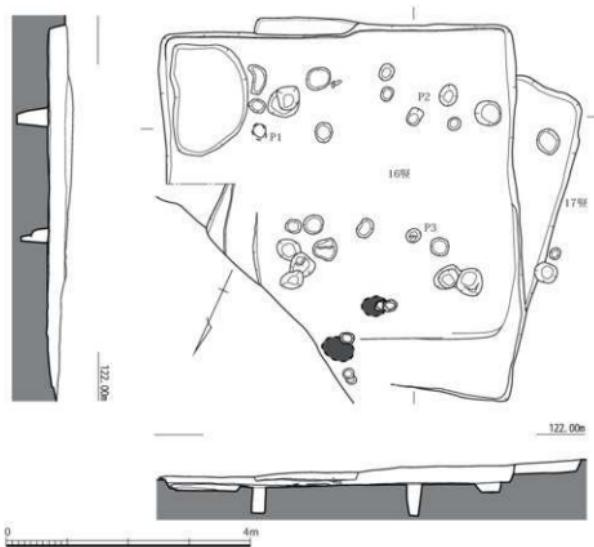
なお、2軒とともに明確にカマドと判断できるものは確認されなかったものの、その痕跡を示す可能性のある焼土が北壁側に確認されている。

遺物は須恵器壺蓋・壺身、土師器甕が出土している。

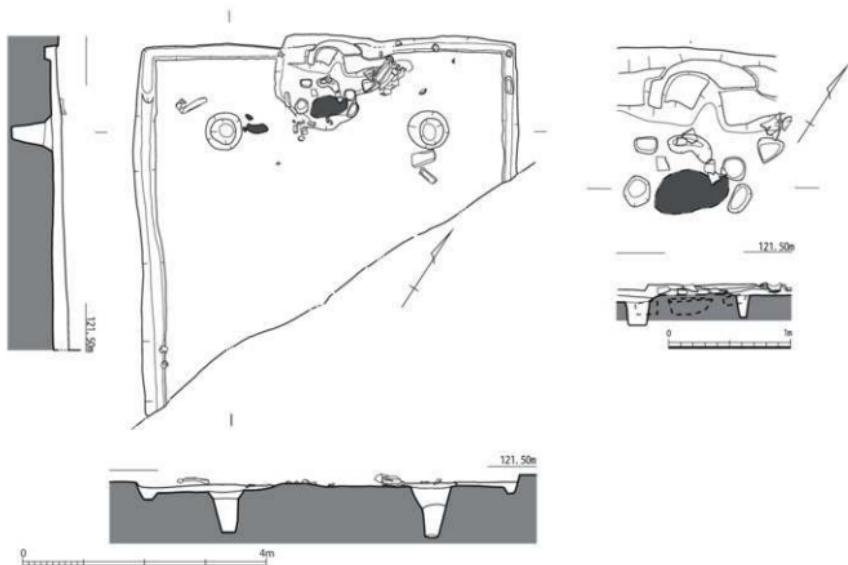
18号竖穴建物（第22図 図版4）

この建物は、16・17号竖穴建物の東側で確認された。平面形は方形を呈するとみられるが、南東側は調査区外へ広がる。調査区内での規模は、北東-南西軸約6.2m、南西壁で約5.9m、検出面から深さ約20cmを測る。床面には全周にわたり壁際溝が掘り込まれている。ピットは2個確認されており、これが主柱穴になるとみられ、位置関係から4本柱であったと推定される。主柱穴の床面からの深さは約70～80cmである。

カマドは北西壁の中央付近に付設され、突出部は見られない。奥壁側は壊されたような状況が見受けられた。袖や袖石、支脚などは残っていないが、袖石の抜き取り痕とみられるピットが確認できた。この抜き取り痕から推定されるカマドの規模は、左袖が約100cm、右袖が約100cm、袖間の幅は袖石側で約65cmを測る。



第21図 16・17号竪穴建物実測図 (1/80)



第22図 18号竪穴建物及びカマド実測図 (1/80・1/40)

遺物は、須恵器壺蓋・皿・匙、土師器甕・壺・高壺が出土している。

19・20号竪穴建物（第23図 図版4・5）

これらの建物は、調査区南側の13号竪穴建物と16号竪穴建物の中間付近で確認され、19号竪穴建物が20号竪穴建物を切る。削平が大きく、平面形は不明であるが、ほかの建物の状況から方形を呈するものと思われる。

まず、19号竪穴建物については、東壁部分が約4.2m残存し、焼土を含む突出部が見られる。このことからカマドの可能性がある。

20号竪穴建物については、東壁が約6.8m、南壁が約1.2m残存し、検出面からの深さは約30cmである。南壁から約3mの位置にカマドと突出部が見られる。袖が比較的残存していたが、袖石や支脚及びその抜き取り痕は確認できていない。カマドの規模は長さ約90cm、幅は奥壁側で約35cm、手前側で約40cmを測る。また、カマドの南東側には、焼土が見られ、カマドの可能性がある。

遺物は19号竪穴建物から土師器鉢、20号竪穴建物から須恵器蓋・壺、土師器甕が出土している。

21号竪穴建物（図版4）

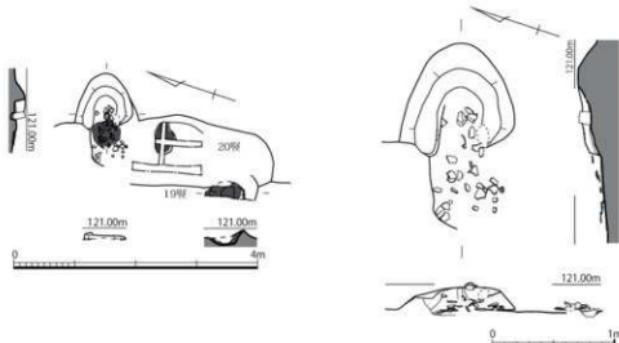
この建物は調査区の南側で確認され、20号竪穴建物に切られる。個別の実測図が残っていないため、詳細は不明であるが、規模は約4.5m×約4.2mと推定される。

23号竪穴建物（第25図）

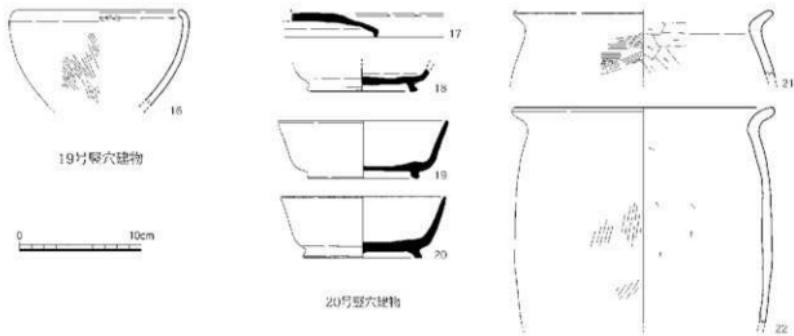
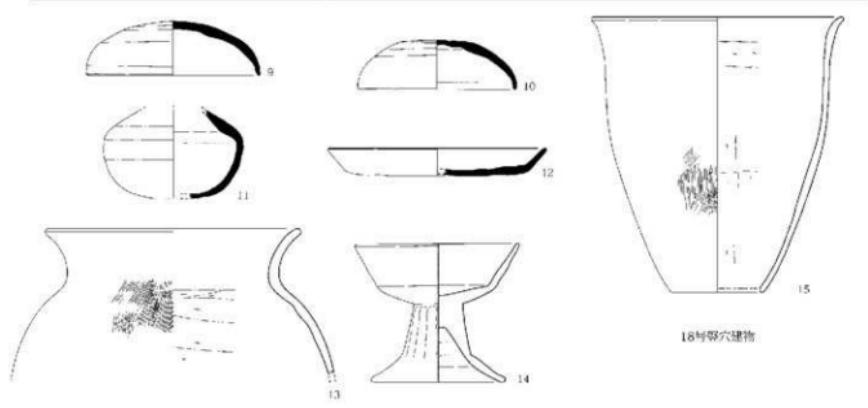
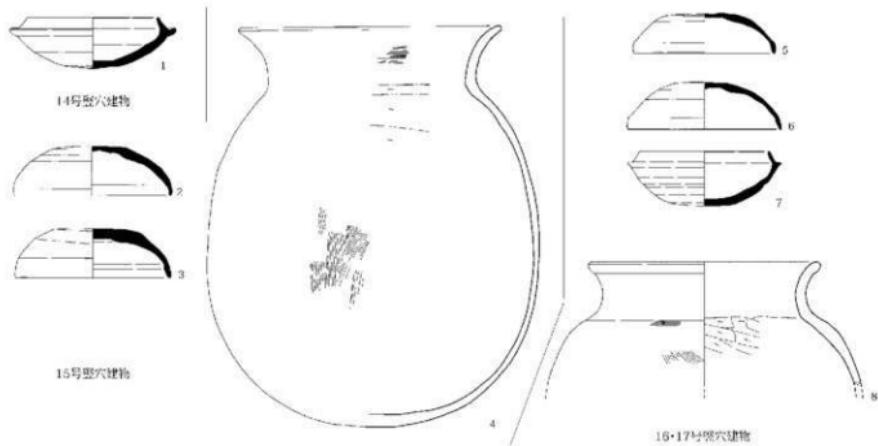
この建物は、調査区北西側で確認され、5号竪穴建物を切り、51号竪穴建物と切り合う。北東側が削平を受けているが、平面形は方形を呈すると思われる。規模は、東西輪約4.2m、南北輪約 $2.8\text{m} + \alpha$ 、検出面から深さ約40cmを測る。床面では、主柱穴になりうるようなピットは確認されなかった。

また、西壁の中央付近にはカマドが付設されていた。わずかに突出部は見られ、袖石の抜き取り痕とみられるピットが確認できた。このピットの内側には火床面が見られた。これらの袖石の抜き取り痕から推定されるカマドの規模は、長さ約65cm、袖間の幅は袖石側で約30cmを測る。

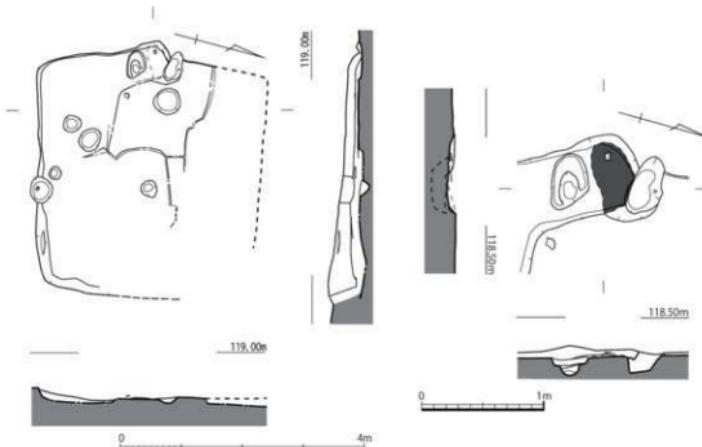
遺物は、土師器片が出土しているが、図化できるものはなかった。



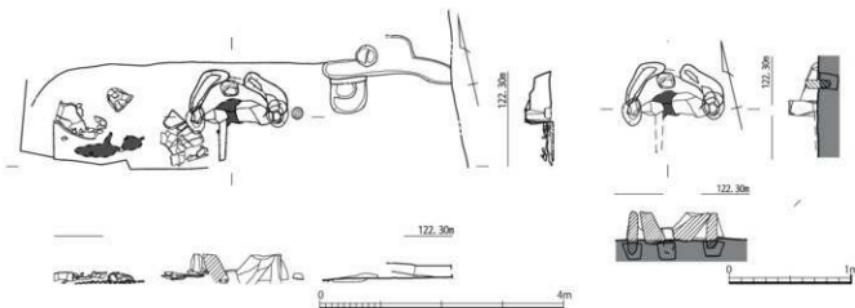
第23図 19・20号竪穴建物及びカマド実測図（1/80・1/40）



第24図 14～20号竖穴建物出土遺物実測図 (1/4)



第25図 23号竪穴建物及びカマド実測図 (1/80・1/40)



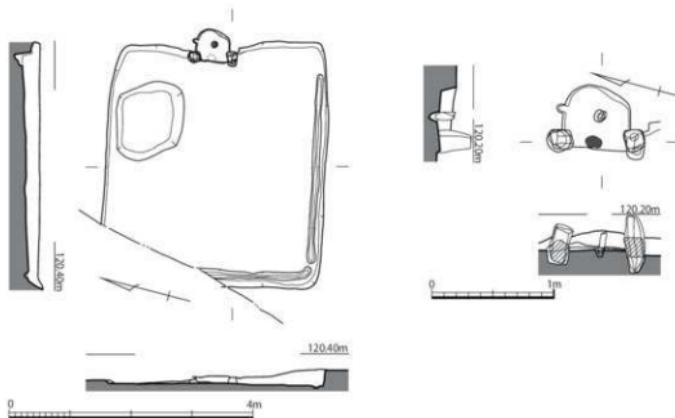
第26図 24号竪穴建物及びカマド実測図 (1/80・1/40)

24号竪穴建物（第26図 図版5）

この建物は、調査区北東側で確認された。東側は調査区外へ広がり、南側は削平を受けているが、平面形は方形を呈すると思われる。調査区内での規模は、東西軸約7.0m + α、南北軸約1.7m + α、検出面から深さ約20cmを測る。床面では、主柱穴になりうるようなピットは確認されなかった。

また、北壁の中央付近にはカマドが付設されていた。煙道や突出部は見られず、両袖や袖石、支脚、天井石が残存していた。このような状況からカマド祭祀は行なわれなかつた可能性がある。カマドの規模は、左袖が約45cm、右袖が約40cm、袖間の幅は袖石側で約50cmを測る。

遺物は、須恵器环身、土師器甕・壺が出土している。



第27図 25号竪穴建物及びカマド実測図（1/80・1/40）

25号竪穴建物（第27図 図版5）

この建物は、調査区中央西側で確認され、26号竪穴建物を切る。平面形は方形を呈するが、北西側の一部が調査区外へ広がる。規模は南北軸約3.6m、東西軸約4.0m、検出面からの深さは約25cmを測る。床面には、ビットは確認されず、土坑状の落ち込みと南壁・西壁に壁際溝が掘り込まれていた。

また、東壁のほぼ中央にカマドが付設されており、全体が突出している。両袖石及び支脚が残存し、両袖石の間には火床面が見られる。カマドの規模は両袖石から奥壁までの長さが約50cm、袖石間の幅が約45cmを測る。遺物は、須恵器壺身・土師器壺・甕・瓶が出土している。

26号竪穴建物（第29図）

この建物は、調査区中央西側で確認され、12号竪穴建物と切り合い、25号竪穴建物に切られる。平面形は方形を呈する。規模は、北東・南西軸が約6.2m、北西・南東軸が約6.8m、検出面からの深さは約20cmを測る。床面には、東壁側・西壁側に壁際溝が掘り込まれる。また、4本のビットが確認され、いずれも主柱穴になると考えられる。

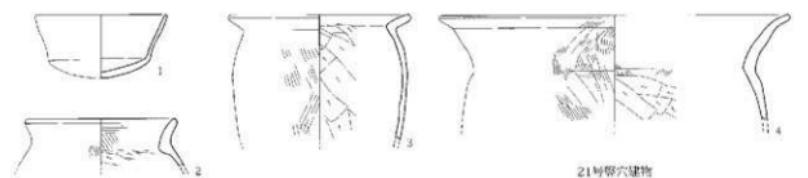
なお、カマドは見られず、その痕跡を示すような焼土なども確認できなかった。

遺物については、図化できるものはなかったが、土師器片などが出土している。

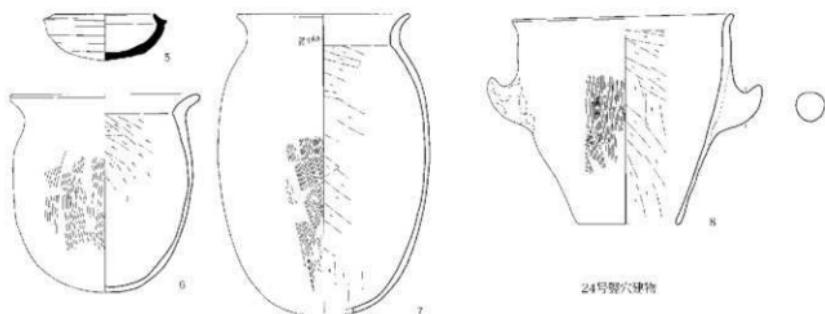
28号竪穴建物（第30図）

この建物は、調査区中央西側の26号竪穴建物の西側で確認された。東側隅の一部が確認されたのみであり、西側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈すると思われ、調査区内での規模は、北東壁約1.4m、南東壁約0.9m、検出面からの深さは約10cmを測る。そのほか、床面において、壁際溝やビット、カマド等は確認されなかった。

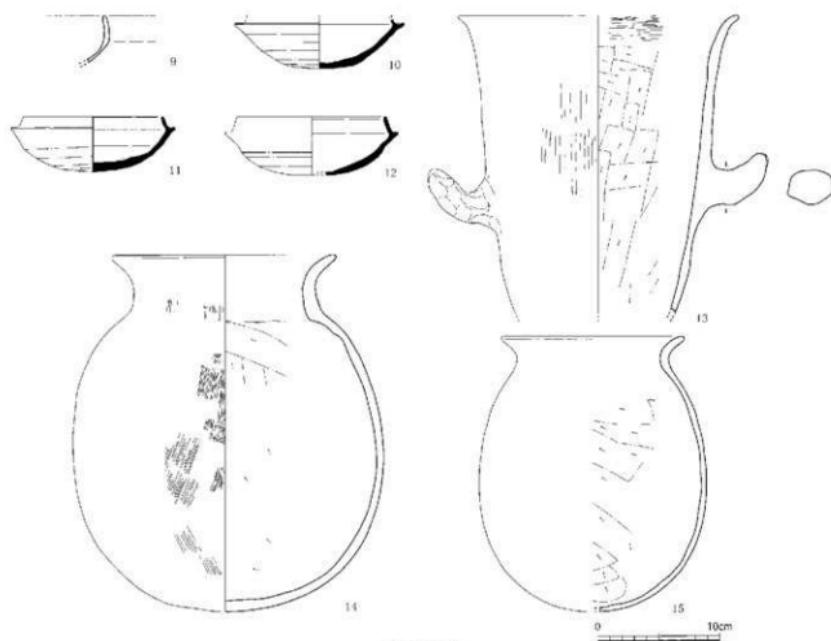
遺物については、図化できるものはなかったが、土師器片などが出土している。



21号竪穴建物

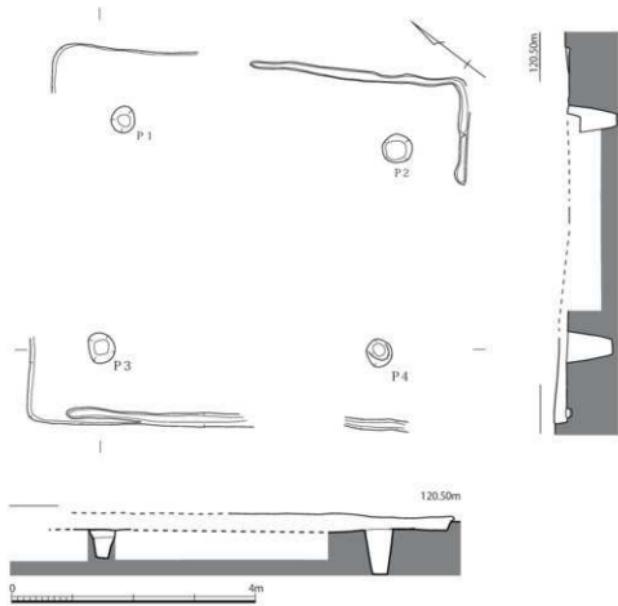


24号竪穴建物



25号竪穴建物

第28図 21・24・25号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)



第29図 26号竪穴建物実測図（1/80）

29号竪穴建物（第30図）

この建物は、調査区北東側、24号竪穴建物の西側で確認され、50号竪穴建物に切られる。東側隅の一部が確認されたのみであり、平面形は方形を呈すると思われる。規模は、北東壁約0.9m、南東壁約1.1m、検出面からの深さは約10cmを測る。床面にはピットが数個確認されたが、壁やカマドは確認されなかった。

遺物は、須恵器環や土師器蓋・顛などが出土している。

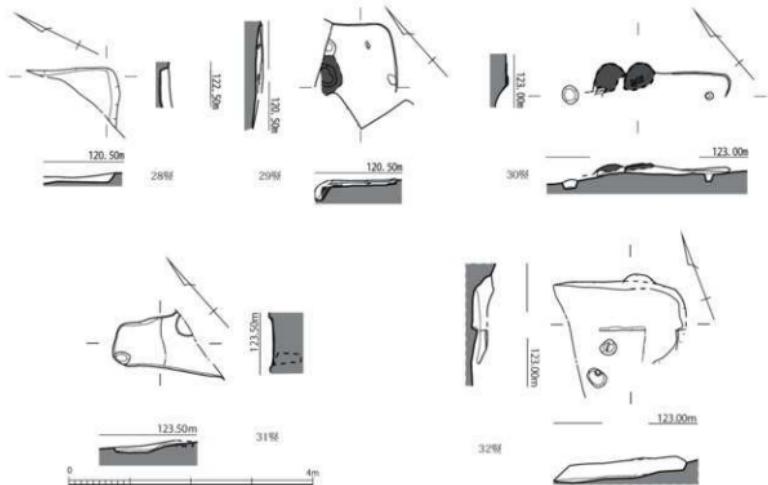
30号竪穴建物（第30図 図版5）

この建物は、調査区北東側で確認され、34・35号竪穴建物に切られる。北東隅の一部のみ確認されており、平面形は方形を呈すると思われる。規模は北東壁約2.2m、南東壁約0.3m、検出面からの深さは約20cmである。床面には、ピットが2個確認されたが、主柱穴とは判断できなかった。また、西側に突出部が2ヶ所見られ、2基のカマドが切り合っている可能性がある。

遺物は、須恵器蓋、土師器環が出土している。

31号竪穴建物（第30図 図版6）

この建物は、調査区の北東側で確認され、2号掘立柱建物と切り合う。西側の一部が確認されているのみで、



第30図 28～32号竪穴建物実測図 (1/80)

西側は調査区外へ広がる。平面形は長方形を呈し、規模は北東・南西軸約0.8m、北西・南東軸約 $1.4 + \alpha$ m、検出面からの深さは約10cmを測る。床面にはピットが確認されたが、主柱穴になる可能性は低い。そのほか、壁際溝やカマド、その痕跡を示す焼土などが確認されなかった。

遺物は、須恵器環や土師質土器環が出土している。

32号竪穴建物（第30図 図版6）

この建物は、調査区北東側で確認された。北東隅の一部が確認されたのみであり、西側は搅乱により削平を受けている。平面形は方形を呈すると思われ、調査区内での規模は北壁約2.1m、東壁約0.5m、検出面からの深さは約25cmを測る。そのほか、床面においてピットが確認されたが、主柱穴になるかは、判断できない。

遺物は出土しなかった。

33号竪穴建物（第31図）

この建物は、調査区北東側で確認され、34～36、48号竪穴建物などを切る。西側は削平を受けているものの、平面形は方形を呈すると思われる。規模は北東壁側で約2.6m、北東・南西軸で約2.8m、検出面からの深さは約20cmを測る。床面にはピットが2個確認されたが、主柱穴になる可能性は低いと考えられる。この他、壁際溝は確認されなかった。また、北西壁側には、焼土が見られ、カマドの可能性がある。

遺物は、土師器環・甕・壺が出土している。

34・35・47・48号竪穴建物（第32図 図版6）

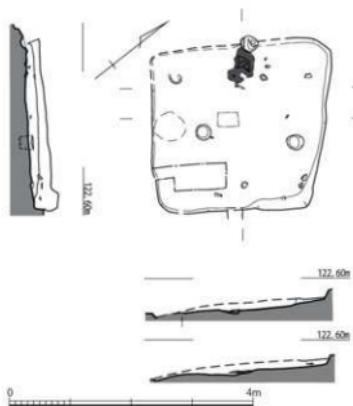
これらの建物は、調査区北東側で確認され、33号竪穴建物に切られる。何れの建物も一部しか確認されていなく、複数の建物の範囲も分かりにくい。そのため、個別での説明が難しいため、4軒分をまとめて記述する。

まず、全体の形状は不明であるが、方形を呈する可能性がある。規模は、34・35号竪穴建物の北壁が約 $6.3\text{ m} + \alpha$ 、東壁が約 $1.4\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さは約40cmを測る。47・48号竪穴建物の規模は、北壁が約 $7.0\text{ m} + \alpha$ 、東壁が約 $1.2\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さは約40cmを測る。床面には、ピットが多く確認されたが、どのピットが主柱穴になるか、判断できなかった。

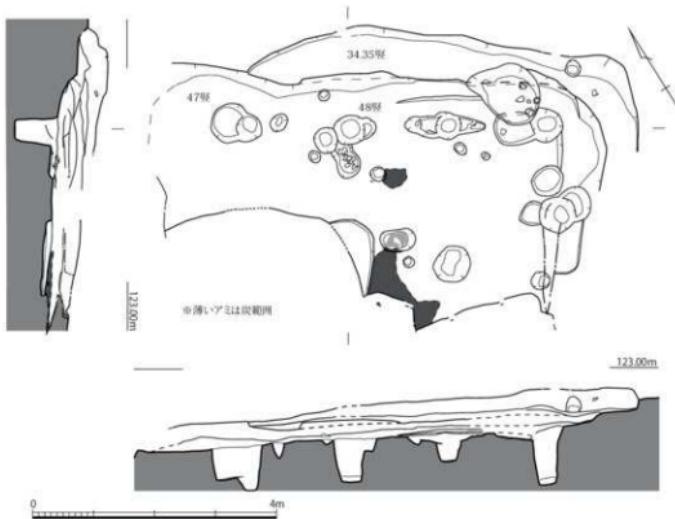
遺物は、34・35号竪穴建物から須恵器壺、48号竪穴建物から須恵器壺蓋・环・高环、土師器环が出土している。

36号竪穴建物（第33図）

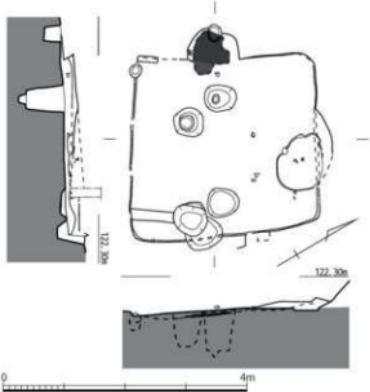
この建物は、調査区北東側で確認され、36号竪穴建物に切られる。平面形は方形を呈し、規模は南北軸約3.0m、東西軸約3.5m、床面までの深さは約20cmを測る。床面にはピットや土坑状の落ち込みが見られるが、ピットが主柱穴になるか、判断はできな



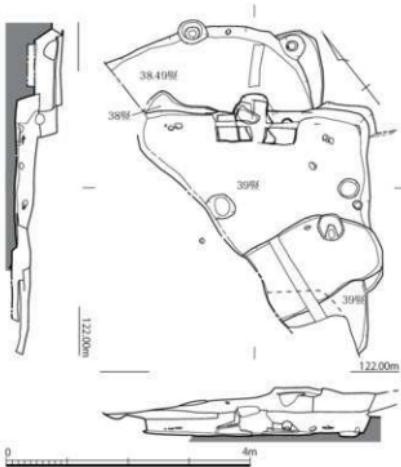
第31図 33号竪穴建物実測図（1/80）



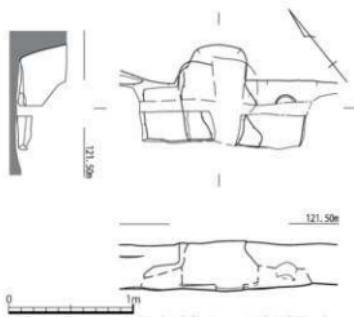
第32図 34・35・47・48号竪穴建物実測図（1/80）



第33図 36号竪穴建物実測図（1/80）



第34図 38・39・49号竪穴建物実測図（1/80）



第35図 39号竪穴建物カマド実測図（1/40）

かった。

また、北西壁の中央付近には、カマドが付設される。火床面及び突出部が見られる。

遺物は、土師器高壺が出土している。

38・39・49号竪穴建物

（第34・35図 図版6）

これらの建物は、調査区北東側で確認され、切り合ひ関係は、49号、38号、39号の順に新しくなる。個別での説明が難しいため、3軒分をまとめて記述する。何れの建物も西側が削平を受けており、平面形は38・39号竪穴建物が方形、49号竪穴建物が不定形を呈する。規模は、38号竪穴建物が北東壁約0.9m + α 、深さ20cm、39号竪穴建物が北東壁約3.5m + α 、南東壁約3.9m + α 、深さ55cm、49号竪穴建物が東西軸約2.5m、深さ30cmを測る。床面には、ピットが数個確認されたが、主柱穴と判断できるものはなかった。

また、39号竪穴建物のカマドは北東壁のはば中央に付設され、全体が突出している。両袖及び袖石、支脚は残存していない。カマドの規模は突出部の長さが約80cm、幅が手前側で約40cmを測る。

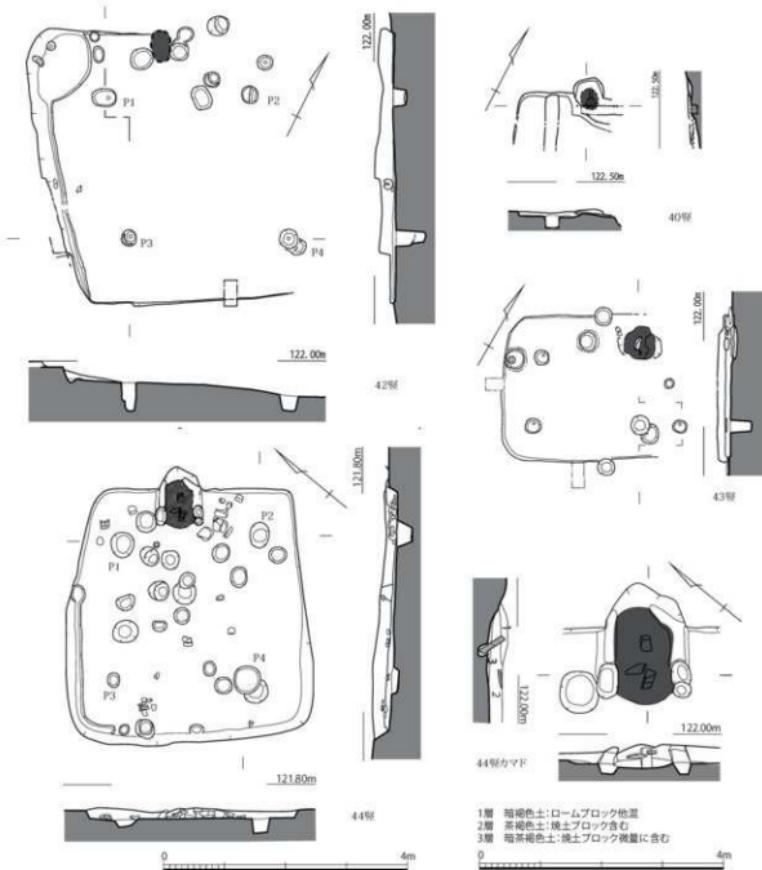
遺物は、39・49号竪穴建物から、須恵器環や土器表・模が出土しているが、38号竪穴建物からは出土しなかった。

40号竪穴建物（第36図 図版6）

この建物は、調査区南西側で確認され、46号竪穴建物を切り、42号竪穴建物に切られる。北西側隅の一部しか確認されていないが、平面形は方形を呈するともみられる。規模は、西壁が約8.9m + α 、北壁は約1.5m + α 、検出面までの深さは約10cmを測る。床面には、主柱穴となるようなピットや壁際溝は確認されていない。

また、北壁には、突出部が見られる。内側に焼土が確認されており、カマドと判断されるが、両袖及び袖石、支脚は残存していない。カマドの規模は突出部の長さが約20cm、幅は約50cmを測る。

遺物は、土師器が出土しているが、図化可能なもの

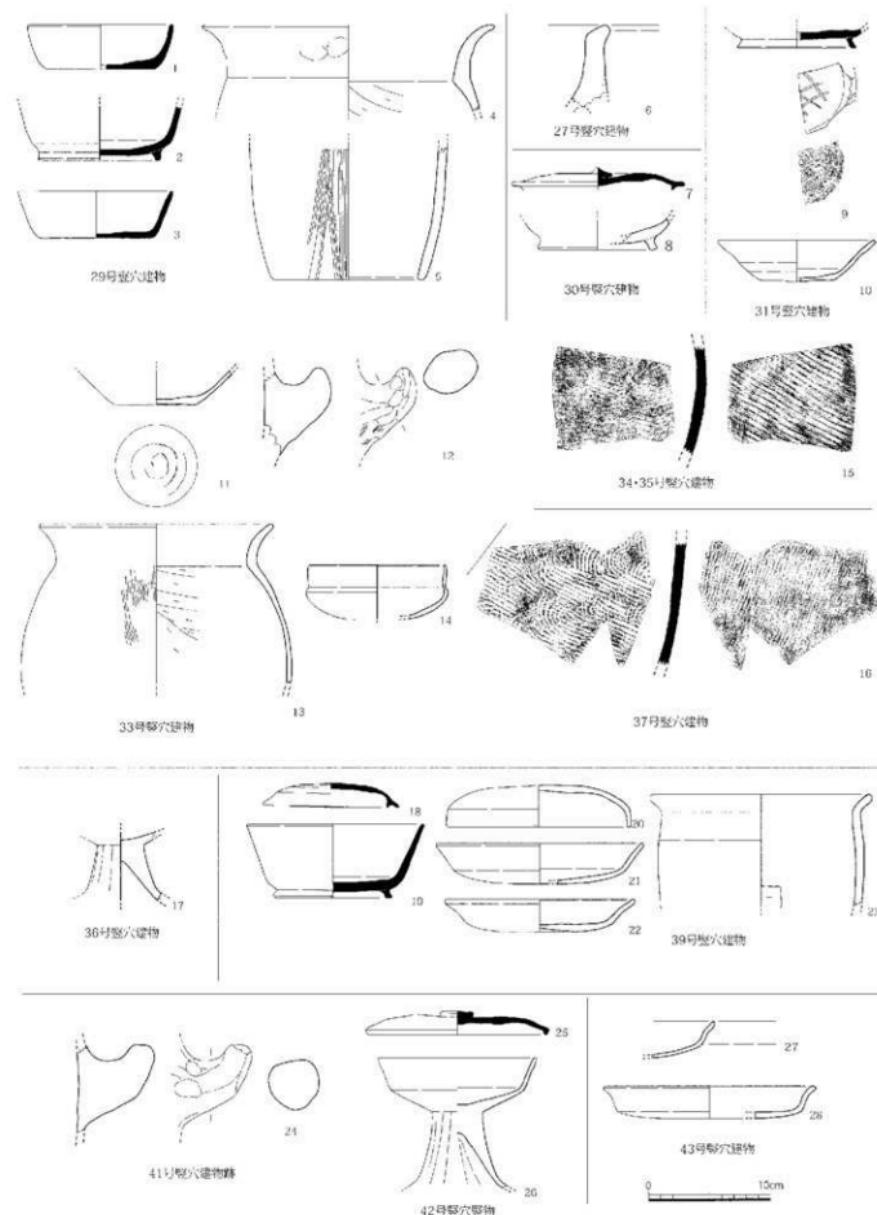


第36図 40・42～44号竪穴建物及び44号竪穴建物カマド実測図（1/80・1/40）

はなかった。

42号竪穴建物（第36図 図版6）

この建物は、調査区南西側で確認され、40・44号竪穴建物を切り、43号竪穴建物に切られる。北東側は削平を受けているが、平面形は方形を呈するとみられる。規模は北西-南東軸が約4.4m、検出面からの深さは約20cmを測る。また、床面に確認されたピットのうち、P1～P4が主柱穴になると考えられ、P4から南西壁までの長さは約3.8mを測る。また、主柱穴の深さは床面から、約20～50cmを測る。この他、南北壁側には壁際溝が掘り込まれる。



第37図 29～43号竖穴建物出土遺物実測図 (1/4)

また、北西壁には焼土が見られた。焼土の両側にあるピットが袖石の抜き取り痕から、カマドの火床面である可能性がある。

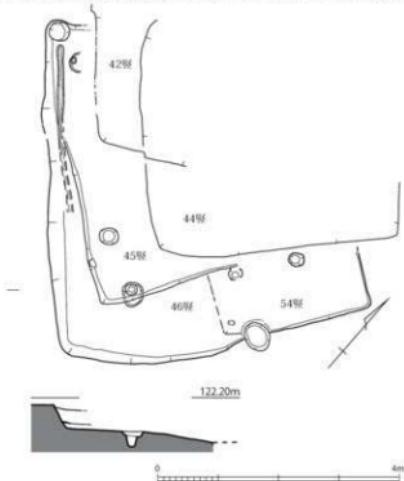
遺物は須恵器蓋、土師器高环が出土している。

43号竪穴建物（第36図）

この建物は、調査区南西側で確認され、42・44号竪穴建物を切る。北東側が削平を受けているものの、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は北東・南西軸が約3.0m+α、北西・南東軸が約3.0m、検出面からの深さは約20cmである。床面には、主柱穴と判断できるようなピットや壁際溝は確認されていない。

また、北壁には焼土が見られた。袖や袖石・支脚、及びその抜き取り痕は確認されなかったが、カマドの火床面である可能性がある。このカマドが北壁の中央にあると想定すれば、この建物の東西軸の規模は約4.4mと推定される。

遺物は、土師器環が出土している。

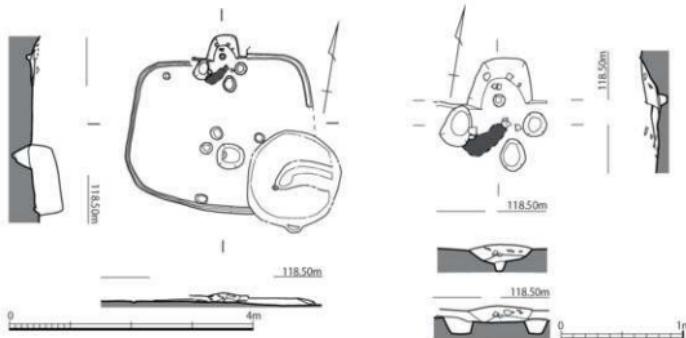


第38図 45・46・54号竪穴建物実測図（1/80）

44号竪穴建物（第36図 図版6・7）

この建物は、調査区南西側で確認され、42・43号竪穴建物を切る。平面形は方形を呈する。規模は北西・南東軸が約3.4m、北東・南西軸が約4.0m、検出面からの深さは約20cmを測る。また、床面には、西側に壁際溝が掘り込まれている。また、確認されたピットのうち、P1～P4が主柱穴になると考えられる。

北東壁中央付近にはカマドが付設され、突出部が見られる。支脚と袖が残存し、袖石は残っていないものの、その抜き取り痕は確認できた。ピットの間には火床面が見られた。カマドの規模は、主軸部分で長さ約100cm、袖間の幅は奥壁側で約50cm、袖石側で約40cm



第39図 51号竪穴建物及びカマド実測図（1/80・1/40）

を測る。

遺物は、土師器環・甕・高环が出土している。

45号竪穴建物（第38図 図版7）

この建物は、調査区南西側で確認され、46・54号竪穴建物を切り、42・44号竪穴建物に切られる。南側の一部しか確認されていないが、平面形は方形を呈すると思われる。規模は南西壁が約 $2.8\text{ m} + \alpha$ 、南東壁が約 $2.3\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さは約30cmを測る。床面には、ピットが2個確認されたが、主柱穴になる可能性は低いと考えられる。

遺物は、土師器甕が出土している。

46号竪穴建物（第38図 図版7）

この建物は、調査区南西側で確認され、45・54号竪穴建物に切られる。南側の一部しか確認されていないが、平面形は方形を呈すると思われる。規模は南西壁が約 $5.6\text{ m} + \alpha$ 、北東壁が約 $2.9\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さは約40cmを測る。床面には、ピットが2個確認されたが、主柱穴になる可能性は低いと考えられる。

遺物は、土師器環が出土している。

51号竪穴建物（第39図 図版7）

この建物は、調査区北西側で確認され、5号竪穴建物を切り、23号竪穴建物と切り合う。平面形は方形を呈するが、南東側の一部が削平を受けている。規模は南北軸約2.9m、東西軸約3.0m、検出面からの深さは約40cmを測る。床面には、ピットは確認されていない。また、南東側を除き、ほぼ全周に壁際溝が掘り込まれている。

カマドは北壁のほぼ中央に付設され、全体が突出している。両袖石及び支脚が残存していないが、それらの抜き取り痕とみられるピットが確認された。両袖石の間には火床面が見られる。これらのピットから推定できるカマドの規模は両袖石から奥壁までの長さが約55cm、奥壁側の幅が約40cm、袖石間の幅が約45cmを測る。

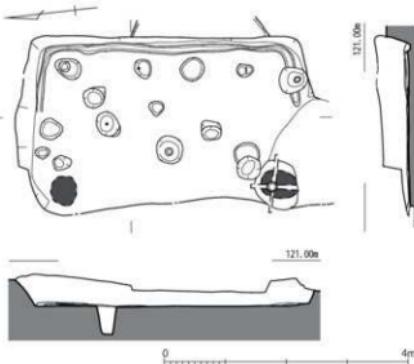
遺物は出土していない。

53号竪穴建物（第40図 図版7）

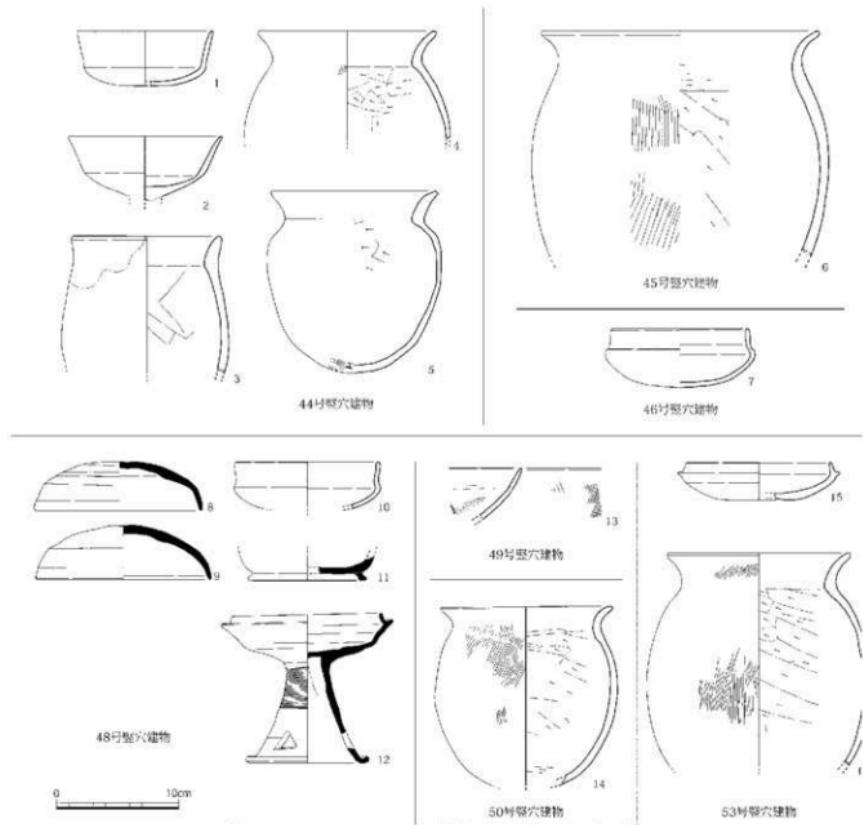
この建物は、調査区北東側で確認され、37～39、49、50号竪穴建物を切る。西側は、擾乱により削平を受けているが、平面形は方形を呈するとと思われる。規模は南北軸が約4.7m、東西軸が約2.8m+ α 、検出面からの深さは約45cmを測る。床面には北東壁、東壁、南東壁にかけて、壁際溝が掘り込まれる。また、ピットが多数確認されているが、主柱穴となるものは判断できなかった。

また、南北両側の壁近くには、焼土が見られた。袖石や支脚、及びその痕跡等は確認されなかったため、カマドに伴うものか、判断できなかった。

遺物は、須恵器环や土師器甕が出土している。



第40図 53号竪穴建物実測図（1/80）



第41図 44～53号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)

54号竪穴建物(第38図)

この建物は、調査区南西側で確認され、46号竪穴建物を切り、44・45号竪穴建物に切られる。南側が残っており、平面形は方形を呈すると思われる。規模は北東・西南軸が約2.5m、北西・南東壁が約1.3m + a、検出面からの深さは約10cmを測る。床面には、ピットが2個確認されたが、主柱穴になるか判断できなかった。

遺物は出土していない。

2. 挖立柱建物

1号掘立柱建物(第42図 図版7)

この建物は調査区北東端で確認された。主軸方向を北西・南東方向に取り、確認された柱間は2間×2間であるが、桁方向は大きくなる可能性がある。規模は柱穴間の心々距離で桁行約3.9m、梁行約3.2m、柱穴の検出面からの深さは約30～60cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。

2号掘立柱建物（第42図）

この建物は調査区北東端、1号掘立柱建物の東側で確認され、南東側は調査区外へ広がる。31号竪穴建物と切り合う。主軸方向を北西 - 南東に取り、確認された柱間から、2間 × 2間の総柱建物になると推定される。規模は柱穴間の心々距離で桁行約4.1m、梁行約3.3m、柱穴の検出面からの深さは約30～60cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。

3号掘立柱建物（第43図 図版7）

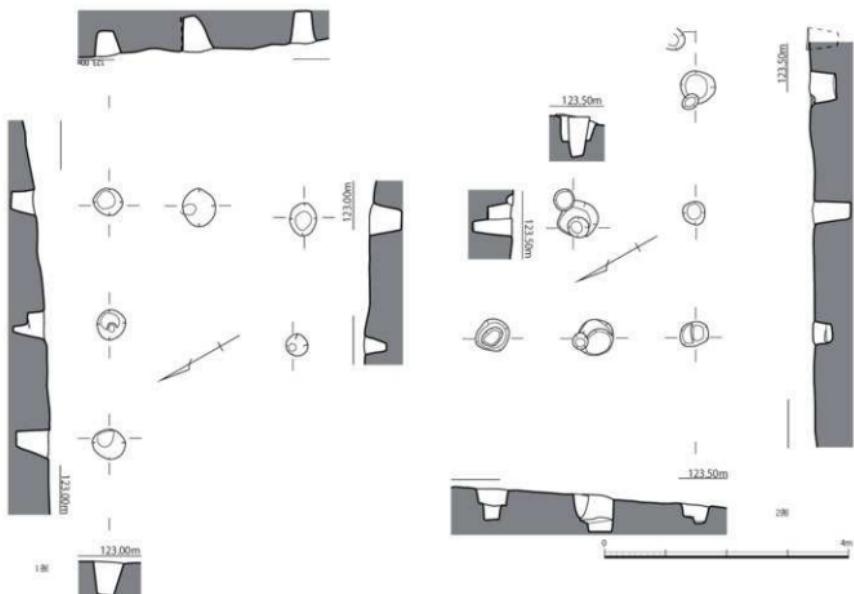
この建物は調査区北側、2号竪穴建物と4号竪穴建物の間で確認された。主軸方向を北西 - 南東に取り、2間 × 2間の総柱建物である。遺物は、図化できるものはなかった。規模は柱穴間の心々距離で桁行約3.3～3.5m、梁行約3.2m、柱穴の検出面からの深さは約40～90cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。

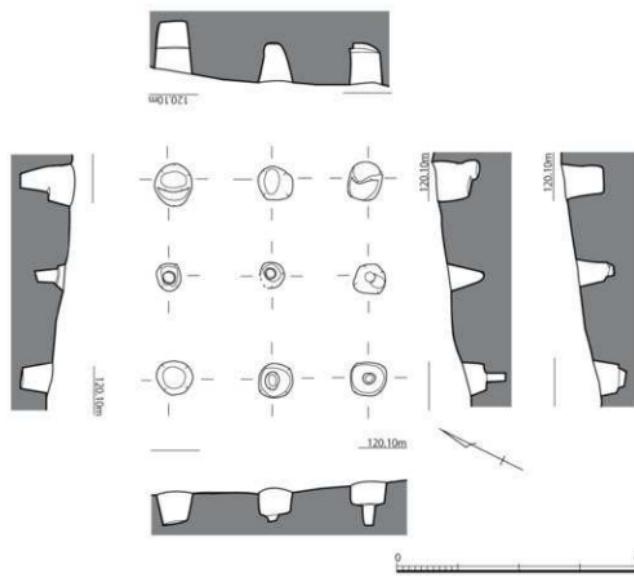
4号掘立柱建物（第44図）

この建物は調査区北側で確認され、1号竪穴建物を切る。主軸方向を北西 - 南東に取り、柱間は桁行3間 × 梁行2間である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約7.0～7.3m、梁行約4.7m、柱穴の検出面からの深さは約20～80cmを測る。

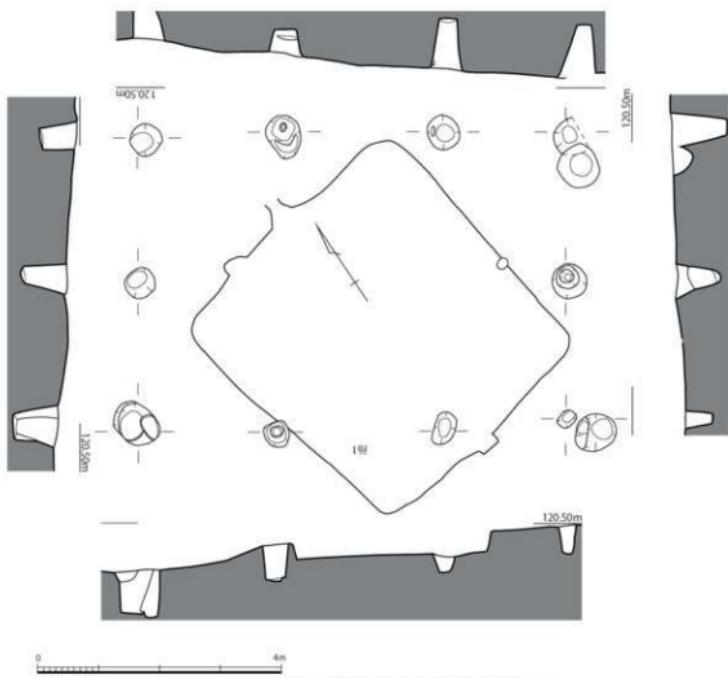
遺物は、図化できるものはなかった。



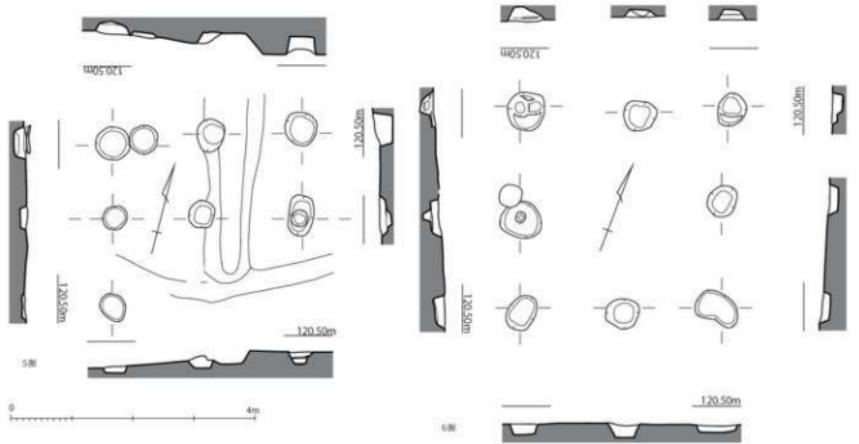
第42図 1・2号掘立柱建物実測図 (1/80)



第43図 3号掘立柱建物実測図 (1/80)



第44図 4号掘立柱建物実測図 (1/80)



第45図 5・6号掘立柱建物実測図 (1/80)

5号掘立柱建物 (第45図 図版7)

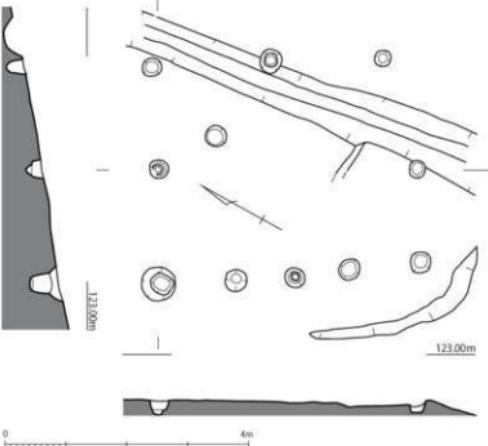
この建物は調査区のほぼ中央で確認され、2号溝状遺構を切る。主軸方向は東西に取る。南側が削平を受けているが、2間×2間の総柱建物になると推定される。規模は柱穴間の心々距離で桁行約3.1m、梁行約2.7m、柱穴の検出面からの深さは約10～30cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。

6号掘立柱建物 (第45図 図版7)

この建物は調査区中央より南寄り、5号掘立柱建物の南西側で確認された。主軸方向は北西-南東に取り、柱間は2間×2間である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約3.4m、梁行約3.3～3.4m、柱穴の検出面からの深さは約10～20cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。



第46図 7号掘立柱建物実測図 (1/80)

7号掘立柱建物 (第46図 図版8)

この建物は調査区南側で確認された。主軸方向は北西-南東に取り、柱間は4間×2間である。ただし、東側の柱穴列は2間分しか確認できていない。規模は柱穴間の心々距離で桁行約3.8～4.2m、梁行約3.4～3.6m、柱穴の検出面からの深さは約20～45cmを測る。

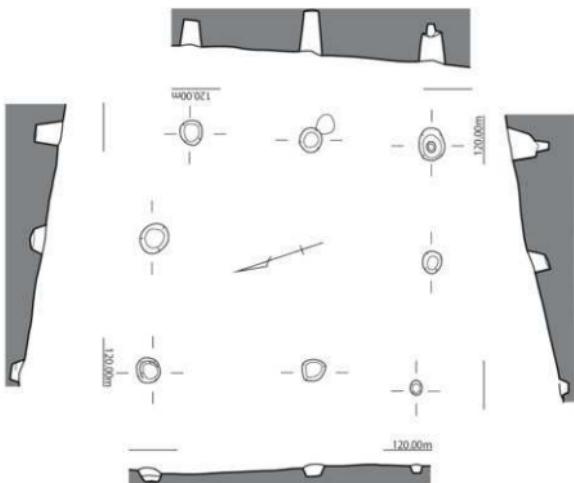
遺物は、図化できるものはなかった。

8号掘立柱建物

(第47図 図版8)

この建物は調査区北側で確認された。主軸方向は南北よりやや西寄りに取り、柱間は2間×2間である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約4.0～4.4m、梁行約3.9～4.0m、柱穴の検出面からの深さは約10～80cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。



第47図 8号掘立柱建物実測図(1/80)

9号掘立柱建物

(第48図 図版8)

この建物は調査区北側、8号掘立柱建物の北西側で確認された。

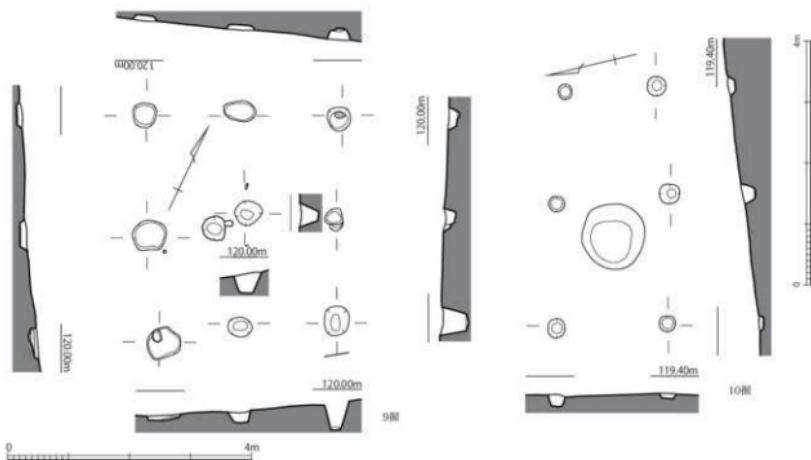
主軸方向は北西・南東に取り、柱間が2間×2間の矩形建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約3.4～3.7m、梁行約3.0～3.2m、柱穴の検出面からの深さは約10～50cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。

10号掘立柱建物(第48図 図版8)

この建物は調査区北側、9号掘立柱建物の西側で確認された。主軸方向はほぼ東西に取り、柱間は桁行2間×梁行1間である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約3.9m、梁行約1.5～1.9m、柱穴の検出面からの深さは約10～20cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。

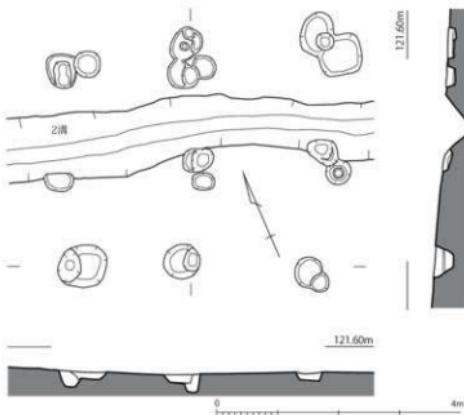


第48図 9・10号掘立柱建物実測図(1/80)

11号掘立柱建物（第49図 図版8）

この建物は調査区南側、18号竪穴建物の北側で確認された。主軸方向は東西よりや北寄りに取り、柱間が2間×2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約4.0～4.4m、梁行約3.2～3.8m、柱穴の検出面からの深さは約10～30cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。



12号掘立柱建物（第50図）

この建物は調査区の南側で確認され、7号掘立柱建物と3号溝状構に切られる。主軸方向は北西-南東に取り、7号掘立柱建物とほぼ同じである。柱間が桁行1間+ α ×梁行1間+ α である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約2.4m、梁行約1.9m、柱穴の検出面からの深さは約30cmを測る。

遺物は、図化できるものはなかった。

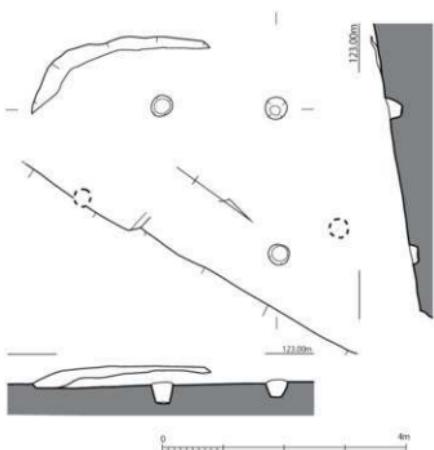
3. 土坑

1号土坑（第51図 図版8）

この土坑は、調査区北側、7号竪穴建物と8号掘立柱建物の中間付近で確認された。平面形は不定円形を呈し、北側で段落ちが見られる。規模は長軸約1.2m、短軸約1.1m、検出面からの深さは最も深い部分で約35cmである。

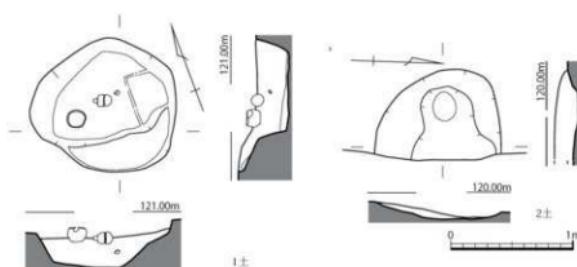
遺物は、五輪塔の一部が出土している。

第49図 11号掘立柱建物実測図（1/80）



2号土坑（第51図）

この土坑は、調査区北端近く、4号竪穴建物の北側で確認された。東側が削平を受けているため、平面形は半梢円形を呈している。土坑内には、段落ちが見られる。規模は長軸約0.7m+ α 、短軸約1.0m、検出面からの深さは最も深い部分で約20cmである。



第50図 12号掘立柱建物実測図（1/80）

第51図 1・2号土坑実測図（1/40）

遺物は、須恵器蓋が出土している。

4. 溝状遺構（第3図）

溝状遺構については、個別図面がなく、詳細は不明な点があるが、遺構配置図から判断できる内容について、記述する。

1号溝状遺構

この溝状遺構は、調査区中央北寄り付近で確認され、調査区を東西に横断する。調査区内での長さは約35mを測る。

遺物は、須恵器壺、土師質土器壺、青磁碗が出土している。

2号溝状遺構

この溝状遺構は、1号溝状遺構の西側で確認され、北西から南東にかけて伸びる。調査区内での長さは約50mを測る。

遺物は、須恵器壺が出土している。

3号溝状遺構

この溝状遺構は、1号溝状遺構に接して確認され、1号溝に切られる。北西から南東に向かって伸び、長さは約13mを測る。

遺物は、陶器擂鉢などが出土している。

4号溝状遺構

この溝状遺構は、調査区中央付近で確認され、2号溝状遺構と平行して伸びる。長さは約6mを測る。

遺物は出土しなかった。

5号溝状遺構

この溝状遺構は、調査区南側で確認され、南から北に向かって伸びる。長さは約20mを測る。

遺物は出土しなかった。

6号溝状遺構

この溝状遺構は、調査区の北西側で確認され、北西から南東に向かって伸びる。長さは約7mを測る。

遺物は、土師器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

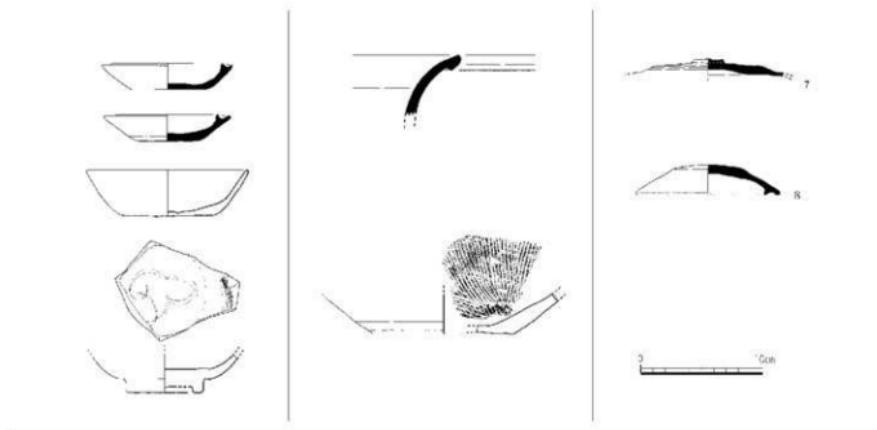
7号溝状遺構

この溝状遺構は、調査区南側で確認され、南東から北西に向かって伸びる。長さは約7mを測る。

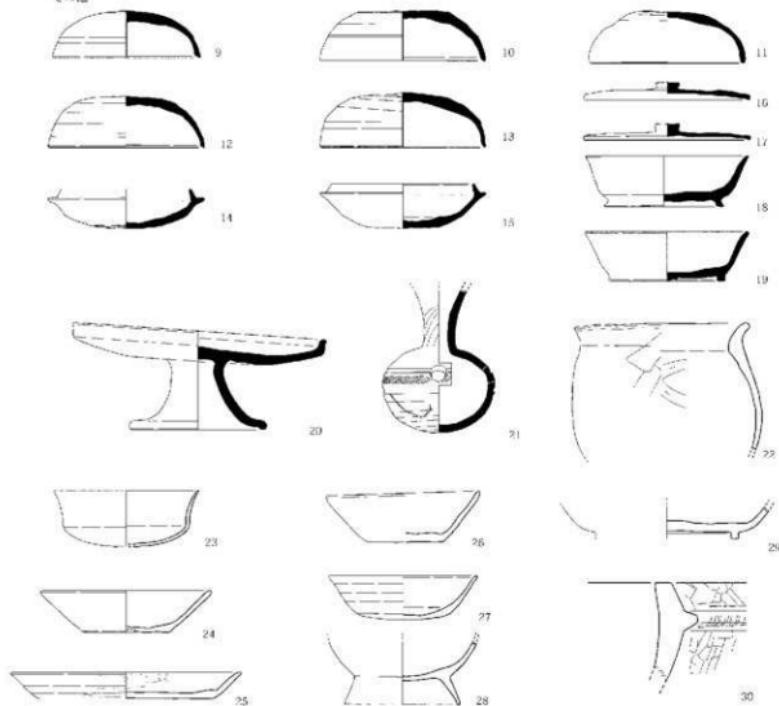
遺物は出土しなかった。

5. その他の遺物

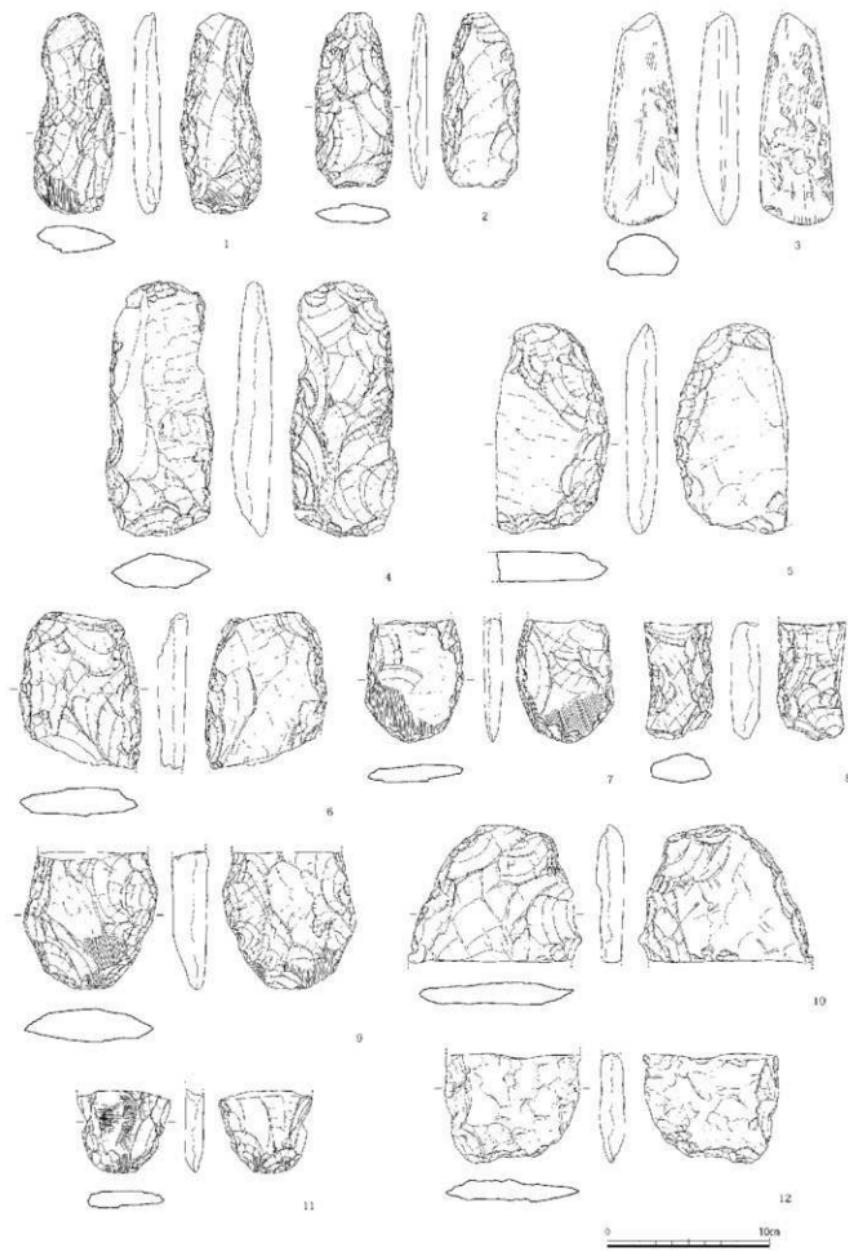
前節までに記述した遺構に伴う土器のほかに、遺構検出中に出土した土器や土製品・石製品・石器などが出土地においており、第52～54図に示す。詳細については、第6・7表を参照されたい。



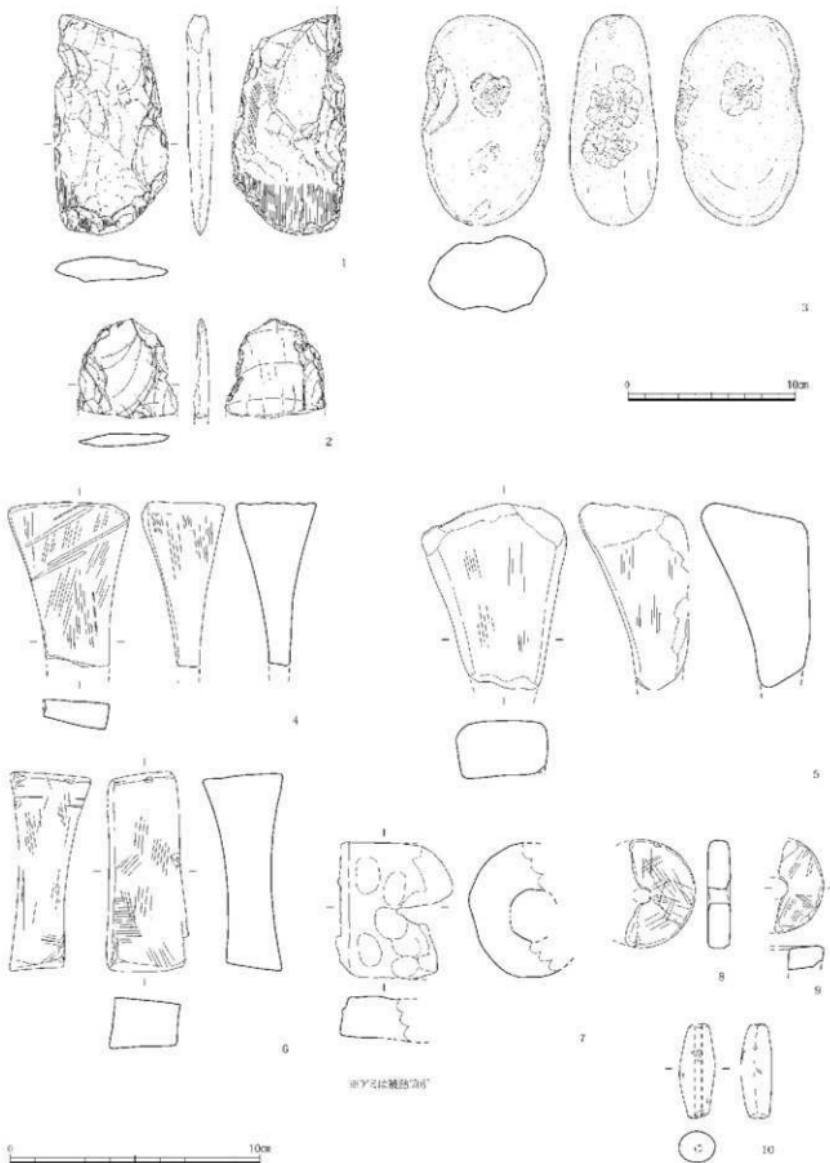
その他



第52図 溝状造構・土坑・ピット・その他出土遺物実測図 (1/4)



第53図 出土石器実測図 (1/3)



第54図 出土石器及びその他の遺物実測図 (1~3:1/3、4~10:1/2)

IV 総括

前章までに、今回の調査で確認された遺構について記述してきた。最後にこれらの遺構の時期と本遺跡の特徴、求来里川流域の集落変遷についてみていく。

竪穴建物に関しては、遺物や切り合い関係などから、古墳時代後期後半（6世紀中頃～後半）と奈良時代（8世紀）の2時期に位置付けられる。

古墳時代後期後半のものとして、確実なものは、1、2（旧）3、5・7・9、12、14～17、24、25、33、44～46、48、50、53号竪穴建物の18軒が挙げられる。一方、奈良時代のものは、2（新）、4、6、10、11、13、18、20、29、30、31、37、39、51号竪穴建物の18軒が挙げられる。

さらに切り合い関係や建物規模・カマドの形態等から、古墳時代後期後半と考えられるのが、26・34・35・41・42・47・49号竪穴建物の7軒、奈良時代と考えられるのが8・19・21～23・28・32・36・38・40・43号竪穴建物の11軒である。

その他、明確な時期が不明な建物や掘立柱建物に関しては、明確な時期を示す遺物はない。しかし、切り合い関係から、1号竪穴建物を切る4号掘立柱建物は6世紀後半より新しいが、竪穴建物の時期を考えると奈良時代の可能性が高い。そのほかの建物については、竪穴建物と同時期の6世紀後半と考えるのが妥当であろう。また、1号土坑からは五輪塔の一部が出土しており、中世のものと考えられる。このほか1号溝状遺構から龍泉窯系の青磁碗が出土しており、14世紀代と考えられる。

最後に長迫遺跡全体で確認された集落について考えてみる。本遺跡では、これまでに約150軒の竪穴建物や20軒以上の掘立柱建物が確認されている。これらの建物は古墳時代後期と奈良時代に属するものである。古墳時代後期以前の建物は、現在のところ確認されていないことから、本遺跡では古墳時代後期に集落が営まれ始め、その後、7世紀代に一旦、姿を消すが、奈良時代に再び現れるという傾向を示す。

この状況を求来里川流域においてみてみると、集落の開始時期は上流域が古いものの、7世紀代の集落がみられなくなることは一致する。その後、上流域では集落が見られないのに対して、中流域で見られる。求来里川流域では、時期により集落を営む範囲が変化しており、その時代や時期ごとに異なる土地利用があったものと考えられる。そのような中、本遺跡の特徴として、古墳時代・奈良時代とともに他遺跡に比べ、建物数が非常に多く、流域最大の集落であったということが指摘できる。

幸運な結果は、調査後16年を経し、ようやく刊行に至った。諸般の事情により、調査担当と報告書担当が異なっているため、整理の過程での図面の不備や所在不明の遺物があった。そのような状況から、十分な報告ができていない点に関してはお詫びいたします。

また、紙幅の都合で参考文献等は割愛しました。お詫びいたします。

第1表 求来里川流域の遺構変遷表

時代 区分	遺跡名	土師器	求来里川中流域						求来里川上流域						
			西岸遺跡			東岸遺跡			舍田遺跡			新ノ坪遺跡			
			C地盤	A地点	B地点	D地点	4次	6次	2次	1, 3次	2, 7次	3次	4次	2次	3次
古墳時代 後期	前半	5号	NH15												
			VII期												
	中期	TK10													
				1～15	1										
	後半	TK05		10, 19	3～10	12～21									
				22～31	31～35	37～41	27								
	後半	TK43		44, 45	29～36	38～42									
				1, 2(古), 3, 5, 7, 8, 12, 20, 21, 23, 25, 28 44～46, 48, 50, 53			2, 4, 5 10～11 1～6軒 10, 19軒								
	後半	TK209													
	後半	TK217													
奈良時代	後半	TK22													
奈良時代			2(古), 4, 6, 10, 11 13, 18, 20, 29～31 37, 49, 51	20, 21 32～37	21, 11 28, 27	1 8									

*数字は堅穴建物番号、斜線は掘立柱建物

*時期が確定なもののみを用意

第2表 出土十器調查表(1)

法器の単位はcm。〇書きは、残存と復元を表す。

地上: A角閃石 B石榴石 C榍石 D赤色蛇子 E白色蛇子 F墨色蛇子 G震羽 H黑蛇 I透辉

第3章 出土器物索引(3)

直径の半径は3cm。口書きは、機存と復元を表す。

船上:A角闘士 B石英 C長6 D赤色粒子 E白色粒子 F黑色粒子 G葉母 HBB4 I-Hの他

第4表 出土土器観察表(3)

遺物番号	書類名	復元	器種	法 異		調 整		施 土	焼成	色 調		考 察 (遺物番号と合田復元を示す)	
				上口	側面	底面	鋸込			内面	外面		
第240E29	29型	土師器	甕	(39.7)	5.6	ハケナフナダ	ケバナフナダレシテ	D+G	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部～体底上部三分の残存・反転復元、カマド出土	
第240E32	29型	土師器	甕	(21.0)	17.75	ハケナフ(眉形)	ナツワタヌリ	B+C+A-D	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部～甕身の残存・反転復元、カマド出土	
第240E34	21型	土師器	平	(19.7)	5.2	淡黃褐色	淡黃褐色	D+G+H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部～体底上部三分の残存・反転復元、有輪底有灰	
第240E32	21型	土師器	甕	(32.0)	3.9	ナゲハケナフ(眉形)	ナハメタヌリ	A+G+H	眞	褐色	褐色	山腹部～体底上部三分の残存・反転復元、カマド出土	
第240E34	21型	土師器	甕	(34.5)	10.5	ナゲハケナフナダ	ケナフ	A+B	眞	褐色	褐色	焼付帯・反転復元、山腹部～側面三分の残存・ガマド出	
第240E4	21型	土師器	甕	28.5	8.7	ナゲハケナフナダ	摩利の鳥頭形不規	H+A-D	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部～体底上部三分の残存	
第240E6	14型	板状器	平	8.2	3.8	ナゲハケナフ	ナゲハナダ	H	眞	灰褐色	灰褐色	受詔經(10.10-11.11)正月第一回転・灰褐色に灰・内面にヘア記号か一部・白輪底	
第240E6	24型	土師器	甕	15.6	16.25	ハケナフナダ	ケバナフナダ	C+B+A-G-D	普通	淡黃褐色	淡黃褐色	焼付帯・淡黃褐色の合併の残存の灰褐色・D+G+Hが無	
第240E6	24型	土師器	甕	(21.5)	26.85	ハケナフナダ	ナゲハナフナダ	B+C-A	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部～体底上部三分の残存・反転復元、カマド出土	
第240E6	24型	土師器	甕	27.2	12.5	ナゲハケナフナダ	ケナフ	A+B+C+D+G	眞	灰褐色	灰褐色	山腹部～体底上部三分の残存	
第240E8	25型	土師器	平	—	3.85	摩利の鳥頭形不規	摩利の鳥頭形不規	H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部～鋼平底・一回復元(ON型)	
第240E10	25型	板状器	平	—	4.05	ハケナフナダ	ナゲナフナダ	B+C	眞	灰褐色	灰褐色	山腹部・灰褐色の合併の残存の灰褐色・反転復元	
第240E11	25型	板状器	平	11.4	6.5	ハケナフナダ	ナラハナフナダ	C+B	眞	灰褐色	灰褐色	受詔經(13.13-14.14)正月第一回転・左	
第240E12	25型	板状器	平	(12.5)	1.8	ハケナフ	ナゲハナダ	H+C	眞	灰褐色	灰褐色	受詔經(14.2)・約4分の残存・反転復元	
第240E13	25型	土師器	甕	(23.1)	24.4	ハケナフナダ	ナハメタヌリ	B+C-A	眞	灰白色	灰白色	受詔經(14.2)・約4分の残存・反転復元	
第240E14	25型	土師器	甕	18.4	29.3	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	B+H+A-D	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部・正月第一回転の灰褐色・反転復元、淡黃	
第240E15	25型	土師器	甕	(33.0)	22.55	ナゲハ	ナハメタヌリ	A+C+B-G	普通	褐色	褐色	全縁の約三分の二・灰褐色・淡黃色・反転復元	
第240E17	29型	板状器	平	(22.0)	19.91	3.7	ナゲハケナフナダ	ナゲ	H	普通	灰白色	灰白色	4分の1残存・ヘア記号・右・反転復元
第240E22	29型	板状器	平	—	9.55	4.7	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	灰白色	灰白色	体底部分(ヨコ)淡黃褐色(4型)
第370E3	29型	板状器	平	—	14.2	ナゲハケナフナダ	ナラハナフナダ	B+C	不真	灰白色	灰白色	2分の1灰褐色	
第370E4	29型	板状器	平	14.2	3.85	ナゲハ	ナゲ	B+C	不真	灰白色	灰白色	2分の1灰褐色	
第370E4	29型	土師器	甕	(24.0)	2.1	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	B+C+A-H	眞	灰白色	灰白色	受詔經(13.13-14.14)正月第一回転・左	
第370E5	29型	土師器	甕	(32.5)	11.25	ナゲハケナフ	ナゲナフ	A+C+B+D+H	良好	淡黃褐色	淡黃褐色	受詔經(14.2)・約4分の残存・反転復元	
第370E8	29型	板状器	平	(22.0)	11.25	ナゲハケナフ	ナゲナフ	A+C+B+D+H	良好	灰白色	灰白色	受詔經(14.2)・約4分の残存・反転復元	
第370E9	29型	板状器	平	—	9.55	4.7	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	灰白色	灰白色	体底部分(ヨコ)淡黃褐色(4型)
第370E10	29型	板状器	平	—	14.2	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	B+C	不真	灰白色	灰白色	2分の1灰褐色	
第370E11	29型	板状器	平	—	14.27	1.7	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	灰褐色	灰褐色	受詔經(13.13-14.14)正月第一回転の灰褐色・反転復元、淡黃
第370E12	29型	板状器	平	—	18.91	2.7	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	灰褐色	灰褐色	体底部分(ヨコ)淡黃褐色
第370E28	21型	板状器	平	(9.6)	1.6	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	灰褐色	灰褐色	高台一部(ヨコ)淡黃褐色(4分の1残存)	
第370E30	1-9	土師器	甕	(33.0)	3.4	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	I+D+A	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	反転復元、ヘア記号	
第370E31	23型	土師器	平	—	6.3	8.2	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部～体底上部の小輪脚、カマド出土
第370E32	20型	板状器	甕	(34.2)	1.7	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	灰褐色	灰褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色	
第370E33	20型	板状器	平	(38.0)	2.7	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	灰褐色	灰褐色	体底部分(ヨコ)淡黃褐色	
第370E34	21型	板状器	平	(38.0)	1.6	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	灰褐色	灰褐色	側面(ヨコ)淡黃褐色	
第370E35	21型	板状器	平	(31.1)	4.4	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	G	眞	褐色	褐色	山腹部10分の1・体部(横幅8分の1)残存	
第370E36	13型	土師器	甕	(37.6)	1.7	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	G	眞	褐色	褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色	
第370E37	13型	土師器	甕	(37.6)	1.7	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	G	眞	褐色	褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色	
第370E38	13型	土師器	甕	(37.6)	1.7	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	G	眞	褐色	褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色	
第370E39	29型	板状器	平	—	5.7	ナゲナフ	ナゲナフ	G+H	眞	褐色	褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色	
第370E40	29型	板状器	蓋	(11.15)	2.05	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	H+C	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	ナゲ付帯、9.0-9.5分の1灰褐色(ヨコ)の残存、右から左へ曲る	
第370E41	23型	土師器	平	—	6.3	8.2	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色
第370E50	29型	板状器	蓋	(13.1)	1.43	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	A+B	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	丸手のみ残存	
第370E51	29型	板状器	蓋	(18.5)	13.1	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	H+D	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部4分の1・体部(横幅8分の1)残存	
第370E52	24-25型	板状器	甕	—	11.6	ナゲナフ	ナゲナフ	H	眞	灰褐色	灰褐色	側面(ヨコ)淡黃褐色	
第370E53	17型	土師器	甕	(31.1)	4.4	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	G	眞	褐色	褐色	山腹部10分の1・体部(横幅8分の1)残存	
第370E56	13型	土師器	甕	(37.6)	1.7	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	G	眞	褐色	褐色	側面(ヨコ)淡黃褐色	
第370E57	13型	土師器	甕	(37.6)	1.7	ナゲナフナダ	ナゲナフナダ	G	眞	褐色	褐色	側面(ヨコ)淡黃褐色	
第370E58	29型	板状器	蓋	(11.15)	2.05	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	H+C	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色	
第370E59	29型	板状器	蓋	(14.5)	8.75	8.05	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	C+B	眞	褐色	褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色
第370E60	29型	板状器	蓋	(13.1)	1.43	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	G+H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	2分の1(ヨコ)の残存・反転復元	
第370E62	29型	土師器	甕	(36.0)	3.4	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	D+G	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	9.0-9.5分の1灰褐色・反転復元	
第370E63	29型	土師器	甕	(36.0)	2.65	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	4分の1(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第370E64	29型	土師器	甕	(37.7)	9.2	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	A+B	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部(ヨコ)淡黃褐色	
第370E65	47型	土師器	甕	(22.5)	18.55	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	A+D+H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	側手ののみ残存	
第370E66	47型	土師器	蓋	(14.6)	1.95	ナゲハケナフナダ	ナゲナフナダ	C+B	眞	褐色	褐色	2分の1(ヨコ)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第370E67	47型	土師器	蓋	(32.0)	10.2	ナゲナフ	ナゲナフ(有輪)	D+G+H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	山腹部(ヨコ)部・外輪脚3分の1・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第370E68	47型	土師器	蓋	(32.0)	3.0	ナゲハケナフナダ	ナゲナフ(有輪)	D+G+H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	2分の1(横幅8分の1)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第370E69	47型	土師器	蓋	(36.0)	2.95	ナゲハケナフナダ	ナゲナフ(有輪)	G+H	眞	褐色	褐色	2分の1(横幅8分の1)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E3	44型	土師器	甕	(10.9)	4.5	ナゲハケナフナダ	ナゲナフ(有輪)	H	カマド	褐色	褐色	2分の1(横幅8分の1)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E4	44型	土師器	甕	(12.0)	4.9	ナゲハケナフナダ	ナゲナフ(有輪)	D+H	眞	褐色	褐色	2分の1(横幅8分の1)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E5	44型	土師器	甕	(12.2)	11.3	ナゲナフ	ナゲナフ(有輪)	F+D+C+B+H	眞	褐色	褐色	側手(ヨコ)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E6	44型	土師器	甕	(19.6)	9.0	ナゲハケナフナダ	ナゲナフ(有輪)	B+C+A	眞	褐色	褐色	側手(ヨコ)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E7	44型	土師器	甕	(13.6)	14.9	ナゲナフ	ナゲナフ	H+I	眞	褐色	褐色	側手(ヨコ)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E8	45型	土師器	甕	(22.5)	18.55	ナゲハケナフナダ	ナゲナフ	A+D+G+H	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	2分の1(横幅8分の1)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E9	46型	土師器	甕	(11.3)	4.43	ナゲハケナフナダ	ナゲナフ(有輪)	D+C+B+D	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	2分の1(横幅8分の1)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E10	46型	土師器	蓋	(13.0)	4.0	ナゲナフ	ナゲナフ(有輪)	D+H	眞	褐色	褐色	2分の1(横幅8分の1)の残存・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	
第410E11	46型	土師器	蓋	(14.2)	4.4	ナゲナフ	ナゲナフ(有輪)	C	眞	淡黃褐色	淡黃褐色	3分の2の残存	
第410E12	46型	土師器	蓋	(31.0)	3.85	ナゲハケナフナダ	ナゲナフ(有輪)	D+H	眞	褐色	褐色	11箇所の1部・外輪脚3分の1・側手(横幅8分の1)の残存・反転復元	

遺物の半径12mm、D=6cm C=6cm D色赤紫 E白色紫 F淡紫 G藍色 H珊瑚

上口:A基円筒 B=6cm C=6cm D色赤紫 E白色紫 F淡紫 G藍色 H珊瑚

第5表 出土土器観察表(4)

被認番号	書類名	復縫	法 番	調 査		地 士	透 底	色 調		備 考
				山根	側面			内面	内面	
第41回4	49回	新潟縣	井	19.0	2.1	回転ナガナナ	ナゲ	白	真	黒褐色 透底5回の反復存
第41回5	49回	新潟縣	高井	12.4	10.1	ナガカヨリ	タケガ	白-C	ナガナナ	灰白色 透底5回の反復存・輪郭透底3回の反復・コロナ形
第41回6	49回	新潟	井	4.25	4.25	柳葉口文	柳葉口切妻の裏	真	真	オーブ
第41回7	50回	上野縣	便	14.1	14.9	ハナツメ	カゲヨナガナナ	B+C-G-A	真	褐色 透材・反復成形・体底手半分の上部透底
第41回8	50回	山形縣	井	11.6	3.1	ヘタツメ	ヘタツメ	A+C-H	半真	淡褐色 淡褐色
第41回9	50回	上野縣	便	15.0	17.4	ハナツメ	タケガ	B+C-A-D	透通	褐色 透材・反復成形・1回透底3回の反復・透通3回分の透行
第42回1	1度	新潟縣	身舟	2.2	2.2	ナガツメ	ナガツメ	白	真	淡褐色 透底3回以外12回反復
第42回2	1度	新潟縣	身舟	8.0	8.1	ハナツメ	ナガナナ	B+C	真	淡褐色 透通10回・残存4回・底部保存・体底3回の反復存・1回
第42回3	1度	新潟	井	13.2	7.6	ハナツメ	ハナツメ	C+A-F	良好	にじみ褐色 にじみ褐色
第42回4	1度	新潟	井	6.0	3.2	輪錐	片切面・輪錐	-	真	(前上) (前) にじみ褐色 オーブ黄色
第42回5	2度	新潟縣	便	5.0	5.0	輪錐ナガ	輪錐ナガ	H	真	淡褐色 自然崩・底部の崩片
第42回6	2度	新潟	輪錐	11.6	3.4	ハナツメカゲ	輪錐	H	真	にじみ褐色 にじみ褐色
第42回7	2度	新潟縣	蓋	4.45	4.45	ナガナナハナツメ	ナガナナハナツメ	H	真	褐色 透底12回の反復存
第42回8	10+5	新潟縣	盖	11.6	2.6	ハナツメナガ	ナガナナ	B+C	真	灰白色 透底4回の反復存・5回の反復存
第42回9	1度	新潟縣	蓋	12.1	3.8	ハナツメナガ	ナガナナ	H	真	褐色 透底4回の反復存
第42回10	1度	新潟縣	蓋	12.6	4.1	ハナツメ	ナガナナ	B+C	真	灰白色 透底4回の反復存
第42回11	1度	新潟縣	蓋	12.75	4.25	ハナツメナガ	ナガナガ	C+B	半真	灰白色 透底5回の反復存
第42回12	1度	新潟縣	蓋	12.8	4.2	ハナツメナガ	ナガナガ	C+B	真	褐色 透底4回の反復存
第42回13	1度	新潟縣	蓋	13.6	4.5	ハナツメナガ	ナガナガ	B+C	真	褐色 透底4回の反復存
第42回14	1度	新潟縣	井	10.8	3.25	ハナツメナガ	ナガナガ	H	真	褐色 透底4回の反復存
第42回15	1度	新潟縣	井	11.7	3.7	ハナツメナガ	ナガナガ	B+C	真	黒褐色 透底4回の反復存
第42回16	1度	新潟縣	蓋	13.65	3.45	トゲナガ	トゲナガ	H	真	褐色 透底3回分の反復存
第42回17	1度	新潟縣	蓋	13.6	3.4	ナガナナ	ナガナナ	H	真	灰白色 透底4回の反復存
第42回18	1度	新潟縣	蓋	13.6	3.4	ナガナナ	ナガナナ	H	真	褐色 透底4回の反復存
第42回19	1度	新潟縣	蓋	13.6	3.4	ナガナナ	ナガナナ	H	真	褐色 透底4回の反復存
第42回20	1度	新潟縣	井	13.4	7.40	ハナツメナガ	ナガナガ	B+C	真	褐色 透底4回の反復存
第42回21	1度	新潟縣	井	20.9	11.25	ナガナナ	ナガナナ	H	真	褐色 透底4回の反復存
第42回22	1度	新潟縣	井	11.7	5.2	ハナツメナガ	ナガナナ	B+C-G	真	黒褐色 透底4回の反復存
第42回23	1度	新潟縣	便	13.8	15.6	ナガ	エキ	H+A+C-E	真	淡褐色 淡褐色
第42回24	1度	新潟縣	便	11.6	4.62	ナガ	ナガ	B+C	真	淡褐色 淡褐色
第42回25	1度	新潟	井	14.0	2.4	トゲナガ	トゲナガ	H+C	真	淡褐色 透底4回の反復存
第42回26	1度	新潟	井	10.8	0.45	トゲナガ	トゲナガ	H	真	褐色 透底4回の反復存
第42回27	1度	新潟	井	12.6	6.2	トゲナガ	トゲナガ	H+C	真	淡褐色 透底4回の反復存
第42回28	1度	新潟	井	12.2	3.6	トゲナガ	トゲナガ	H+C-C	真	淡褐色 透底4回の反復存
第42回29	1度	新潟	身舟	9.45	5.2	ハナツメナガ	ナガナナ	D	真	淡褐色 透底4回の反復存
第42回30	1度	新潟	身舟	11.6	2.6	ハナツメナガ	ナガナナ	D+B	真	淡褐色 透底4回の反復存
第42回31	1度	新潟	身舟	8.2	2.2	ナガナ	ナガナ	D	真	褐色 透底4回の反復存

此表の単位はcm、()書きは、複数を示す。

脚注:A右肩印 B右肩 C右肩 D白色蛇子 E白色蛇子 F白色蛇子 G獲得 H鉛錐 Iその他

第6表 出土石器・石製品・土製品観察表

被認番号	遺物名	遺種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第53回1	表保	石斧	安山岩	12.40	5.00	1.70	127.5	局部磨製
第53回2	一柄	石斧	安山岩	10.80	4.85	1.20	74.5	
第53回3	4柄	石斧	安山岩	11.00	4.55	2.55	236.9	標査がみられる
第53回4	24柄	石斧	安山岩	8.45	16.70	1.70	149.7	標査が裏面にみられる
第53回5	12柄	石斧	角閃石安山岩	12.90	7.00	1.95	255.4	
第53回6	一柄	石斧	安山岩	9.60	7.40	1.85	147.9	裏面に標査がみられる
第53回7	23柄	石斧	安山岩	17.60	6.00	1.15	74.4	
第53回8	一柄	石斧	安山岩	7.20	4.10	1.80	80.6	
第53回9	19柄	石斧	安山岩	8.45	8.20	2.20	128.0	局部磨製
第53回10	一柄	石斧	安山岩	15.70	6.65	2.45	261.2	裏面一部に擦痕
第53回11	10柄	石斧	安山岩	5.00	5.70	1.15	38.7	擦痕
第53回12	4柄	石斧	安山岩	16.70	8.30	1.55	105.6	裏面に擦痕
第54回1	表保	石斧	安山岩	13.20	6.00	1.50	167.1	両面に擦痕がみられる
第54回2	9柄	石斧	安山岩	6.65	6.00	0.90	35.00	
第54回3	29	回臼	角閃石安山岩	12.60	7.75	5.30	635.0	
第54回4	13柄	研石	細粒花崗岩	6.60	4.80	3.30	89.30	約2分の1残存
第54回5	33柄	研石	砂岩	7.50	5.80	4.40	180.6	2分の1の残存
第54回6	29柄	研石	細粒花崗岩	8.0	3.25	3.2	103.6	日付充形
第54回7	16柄	輪錐	角閃石	7.60	8.20	2.00~2.8		一部残存
第54回8	一柄	紡錘車	研石	7.60	3.60	0.9	11.5	約2分の1の残存
第54回9	一柄	紡錘車	研石	7.60	3.60	1.1	10.2	
第54回10	6柄	土製品	粗粒の砂岩・小石	3.80	1.45	1.25	5.30	色彩顔料塗布

単位はcm。()内は現存長



調査区北側空中写真（東から）



調査区南側空中写真（東から）

写真図版 2



① 1号竪穴建物発掘状況（南から）



② 1号竪穴建物カマド発掘状況（南から）



③ 2号竪穴建物発掘状況（南から）



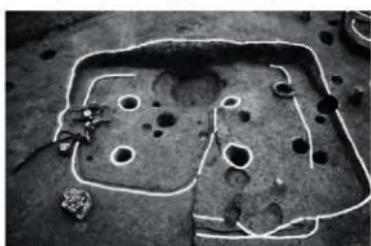
④ 2号竪穴建物カマド発掘状況（南から）



⑤ 3号竪穴建物発掘状況（南から）



⑥ 3号竪穴建物カマド発掘状況（南から）



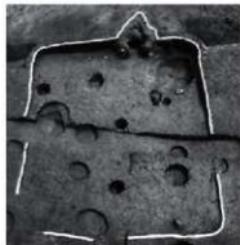
⑦ 5・23・51号竪穴建物発掘状況（西から）



⑧ 6号竪穴建物発掘状況（南西から）



① 6号竪穴建物カマド発掘状況（南西から）



② 8号竪穴建物発掘状況（南西から）



③ 8号竪穴建物カマド発掘状況（南西から）



④ 9号竪穴建物発掘状況（東から）



⑤ 9号竪穴建物カマド発掘状況（東から）



⑥ 12・25・26号竪穴建物発掘状況（南から）



⑦ 13号竪穴建物発掘状況（西から）



⑧ 13号竪穴建物カマド発掘状況（西から）

写真図版 4



① 14号竪穴建物発掘状況（方向不明）



② 15号竪穴建物発掘状況（南から）



③ 15号竪穴建物カマド発掘状況（南東から）



④ 16・17・22号竪穴建物発掘状況（南東から）



⑤ 18号竪穴建物発掘状況（南東から）



⑥ 18号竪穴建物カマド発掘状況（南東から）



⑦ 19～21号竪穴建物発掘状況（南から）



⑧ 19号竪穴建物カマド発掘状況（西から）



① 20号竪穴建物カマド発掘状況（西から）



② 20号竪穴建物焼土発掘状況（西から）



③ 24号竪穴建物カマド発掘状況（南から）



④ 24号竪穴建物カマド発掘状況（南から）



⑤ 25号竪穴建物発掘状況（西から）



⑥ 25号竪穴建物カマド発掘状況（西から）



⑦ 30～39号竪穴建物発掘状況（北東から）



⑧ 31号竪穴建物・

2号掘立柱建物発掘状況（北西から）



① 32号竪穴建物発掘状況（南から）



② 34・35号竪穴建物発掘状況（南西から）



③ 38号竪穴建物発掘状況（南西から）



④ 39・51号竪穴建物発掘状況（南から）



⑤ 39号竪穴建物カマド発掘状況（南西から）



⑥ 40号竪穴建物発掘状況（南東から）



⑦ 42号竪穴建物発掘状況（南東から）



⑧ 44～46号竪穴建物発掘状況（南西から）



① 44号竪穴建物発掘状況（南西から）



② 44号竪穴建物カマド発掘状況（南西から）



③ 46号竪穴建物発掘状況（南西から）



④ 51号竪穴建物カマド発掘状況（南から）



⑤ 53号竪穴建物発掘状況（南から）



⑥ 1・3号掘立柱建物発掘状況（北西から）

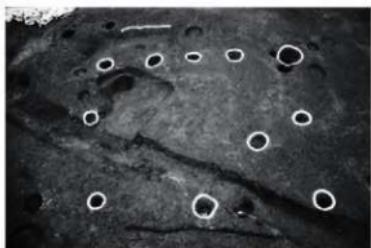


⑦ 5号掘立柱建物発掘状況（西から）



⑧ 6号掘立柱建物発掘状況（北から）

写真図版 8



① 7号掘立柱建物発掘状況（北東から）



② 8号掘立柱建物発掘状況（北東から）



③ 9号掘立柱建物発掘状況（南東から）



④ 10号掘立柱建物発掘状況（西から）



⑤ 11号掘立柱建物発掘状況（南から）



⑥ 1号土坑発掘状況（北から）



6-6



6-9



6-20



6-24



6-25



6-27



8-1



8-2



15-2



10-12



10-14



15-3



15-5



15-17



15-18



15-10



19-8



19-9

写真図版 10



19-21



19-22



19-26



19-27



24-4



24-13



24-10



28-5



24-14



24-15



28-6



28-13



28-14



37-10



37-18



37-25



37-19



41-4



41-5



41-12



41-7

41-14



41-16



52-4



53-1



53-3



52-28



52-21



54-3



54-8, 9



54-7



54-10



54-4



54-6

報告書抄録

ふりがな	ながさこいせきCちてん
書名	長迫遺跡C地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第118集
編著者名	若杉 竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2015年3月31日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長迫遺跡	大分県日田市 大字有田	44204-6	204223	33° 19' 43"	130° 58' 1"	19980417 ~ 19980906	3,000 m ²	記録保存調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長迫遺跡	集落	古墳 古代	堅穴建物54、掘立柱建物12 溝状遺構7、土坑2、ピット多数	土師器、須恵器 土製品、石器、石製品、	古墳時代から奈良時代 のかけての集落

要約	遺跡は日田盆地東部の求来里川右岸の緩斜面及び谷部に位置する。本遺跡では今回の調査以外に、3箇所において調査が行われており、古墳時代後期及び奈良時代の集落が確認されている。 C地点の調査においては、古墳時代後期半と奈良時代の堅穴建物や掘立柱建物が確認された。本遺跡におけるそのほかの調査の内容とほぼ同様の状況が見受けられ、求来里川右岸の緩斜面や谷部に当該期の集落が広がることが明らかとなった。
----	--

長迫遺跡C地点

日田市埋蔵文化財調査報告書第118集

2015年3月31日

編集 日田市教育庁 文化財保護課
 877-0077 大分県日田市南友田町516-1
 発行 日田市教育委員会
 877-8601 大分県日田市田島2-6-1
 印刷 日田時報紙器印刷株式会社
 877-0086 大分県日田市二串町345-3



日田市